双蝶蝶曲輪日記

第一　浮瀬の居續に相圖の笛賣

歌　爰に一つの望がござる。京の女郎に長崎衣裳着せて。ちゝやちん〳〵ちつくり江戸の張を持たせて。大阪の揚屋で遊びたい。ほんにそれもよかろかい。飲めや謠へや一寸先は闇の夜の花を見るのもナホス　ツシ一趣向と。　地　浮瀬が奥庭の梅花の枝に蠟燭釣り夜の。花見を夜通に。飲み明かすは山崎與五郎。藤屋の吾妻姉女郎の都諸共居續けに　小オクリ　彈いつ。歌うつ幇間の佐渡七。御機嫌をとり邊山かはい。〳〵の鳥の聲。ツシ夜明け前とぞ知られける。

詞　コレ旦那。お目がとろ〳〵致します。吾妻様や都様は御酒が足らぬか睡氣が見えぬ。浮瀬で朝座と出掛けう。コレ中居衆。輕いお肴早う〳〵。いかさま其方がいふ通り。此方ばかりが醉うたとて上客の都殿に。酒が足らいで氣の毒。殊に追付勤をお引きなさるゝげな。番頭の權九郎がきつい執心。女房になつてやる氣はないかえ。したが八幡の南與兵衛と深い中と聞き及べば。定めて工面がしてあらう。

地　何にもせよ目出度いお仕舞。吾妻も太夫にあやかれ〳〵。　詞　ほんに私も都様にあやかつて。廓の苦患が遁れたい。そりやもう魂ての事いな。　地　與五郎様へ嫁入の時この都は仲人役。イヤ〳〵　詞　其嫁入の風が變つて氣の毒。吾妻様は知つてござらうが。旦那はお聞きなされまい。それは氣掛り佐渡七聞かせい。されば彼の西國のお侍。平岡郷左衛門様が吾妻様を請出すとて。井筒屋で昨日から。揉みに揉んで手附金の御才覚。何程二腰極付けてござつても。つい金は出來難いやら。今に於て沙汰がない。たとへ沙汰があつたとて此吾妻は。郷左衛門様に身請しらるゝことは嫌々。そりや御道理。今でも旦那から三百兩といふ手附が渡れば。最早今日から山崎の奥様。彼のお侍が。あをちやつても指さす事もなりませぬ。　地　半時でも早う手附の渡つた方へ相談が極れば。今日一日が夫婦になるかならぬの境。　詞　いはゞたつた三百兩何處ぞに積んであらうのに。ア、金が欲しいな。歌二八十六で文付けられて。二九の　ナホス　詞　エ、佐渡七様何ちやいな。吾妻が顔も知らず。面白さうにおかしやんせ。ノヽイヤ〳〵イヤ今日お金が調はねばお前はお侍に添はねばならぬ。ア、ひつこいわいな。　地　ヲツト心得。　詞　最早座敷に佐渡七が飲みさう

な肴はないか。ヲヽそれよ。酒故には花を貰うた末社もある。我は賤しき幇間なれども。酒飲むことは誰に劣らんと。㊟酒飲柄杓追取り此。㊟冷し物鉢を前に置き。栗にもせよ。梨にもせよ。志す所は我が肴。明日は腹が損ねうとも。だんない〳〵大事ない。コリヤ〳〵佐渡七。もう見度うないつくしを籠めい。今我が手附の話を聞いては暫しが間も待たれぬわい。此度おれも權九郎連れて。屋敷の爲替三百兩請取りに下つたれば。幸ひ其金を手附に渡し其侍めに鼻明かせう。佐渡七は大儀ながら石町の宿屋へ往て。手代の權九郎に金子請取り。直に藤屋の親方に渡し。手附の請取取つて來い。ヱヽ味な事が氣に障つて酒がとんと醒果てた。㊟所をかへて飲み直さう。君達此方へと手を引いて。ヘルフシ奥へ入れば佐渡七は。何でもして來いよい銀儲。無間の鐘を撞當てたと心も空に飛石傳ひ表へ出で。向うを見れば野道よりいつこかはと手代イヱ〳〵そんな事ぢやない。お前も御存じの彼の屋敷のお侍が。吾妻樣を身請す殿。㊟ヤア權九郎樣。今逢ひに參る所。それは幸ひ。都が事が首尾ようなつたか。るとて。今日明日の中に手附金を渡す筈。それで旦那が以ての外急が來て。半時も

早うお前から金三百兩請取つて。手附に渡せといはるゝか。こりや面白い。都をば手に入る金子の蔓に取付いたぞ。とは又どうぢやな。されば。汝にも常々話して置く通り。かうした事もあらうと思ふて。これを見よ。これは昨日請取つた爲替金三百兩。此又三百兩はおれが豫て拵へ置いた眞鍮小判。是はしやんと掏替へて鋼脈包に與五郎の印判押させ。向うから尻が來るか。あのたわいなしに科を負はせる權九が計略。扨もしたり。首尾よう往たらばコリヤ佐渡七。塲葭原か阿波座にて三間口を買うてやろ。こりや忝い。それならば奥へ往て。默れ〳〵。贋包に印判をでつかりさしたら此方の物と。蹤合せて權九郎。フシ佐渡七伴ひ入りにける。塲生業はフシ草の種とて。樣々に。世の憂きふしの笛細工。傘に小笛をぶら〳〵と子供たらしの荷ひ賣。清水邊を吹き歩き行き。詞サア〳〵買うたり。横笛鹿笛唐人笛。鼻で吹くのが猪笛。塲喇叭ちやるめら笙の笛と フシ吹立て〳〵賣立つる。歌笛の音による鹿ならで。ナホス合圖の笛と聞くよりも。都は竊と座敷を脱出で見れば紛はぬ其人と。フシ路次下駄横に走出で。詞ヲ、南與兵衛樣。よう逢ひに來て下さんした。さればいの。俺も我が身の文見ると。昨夕來うと思うたれど。此浮瀨は揚屋と違うて。夜はちよつとも逢はれまいと塲思うて商の出がけに來たと。いふ顏つれ〳〵打眺め。以前は八幡で南方與兵衛樣とて。人に人を使うた身の上。仕付もせぬ商でア、いとしぼや甚う顏に窶れが見える。詞アノそれいはうとて呼寄せたか。ア、譯もない。詞イエさうでない外に話す事がある。塲よし又お前の顏が見たさに。呼寄せたら科になるかえ。詞話したいといふは與五郎樣の手代權九郎。幇間の佐渡七諸共に。昨日から段々と。私にいふのを聞かしやんせ。追付年も明くげなれば。何かとつけて心に叶はぬ事があろ。借錢萬事を請込まう。何卒逢うてくれんかと。あの佐渡七面めが同じやうにあた憎てらしい。何處で聞いたやらお前の事迄いひくさる。そりや死際に樂しうなると。よい鳥が掛かつて幸福。逢うて遣つたがよいわいの。逢ふ氣ならお前にやいはぬ。塲もし疑の心もあろかと。思うていふに胴慾なと スエ恨み。つらみも フシ人目を忍び。詞ア、誰やら來るわいなと。塲隱るゝ間もなく幇間の佐渡七。詞ハア都樣爰には何して。さればいな。あの笛の音が面白さに爰迄聞きに來たわいな。ア、大人氣ない。今日中に返事聞切るとて。權九郎樣も待つてござる。我等は又吾妻樣の身請の手附。今持つて參ります。塲後に御見と言捨てて。

フシ曲輪を指して急ぎ行く。地エ、ひよんな者が來て。話の邪魔と立寄れば。都様々々と座敷より仲居が聲。詞ヲ、忙しな。あれでは何も話されぬ。地私が來る迄切戸の陰に待つてゐて下さんせ。やいの〳〵の返事さへ領き〳〵南與兵衛。荷を打擔げ物陰に。フシ暫し忍んで待ちゐたる。地師走の日脚忙しきに。世事に構はぬ西國武士平岡郷左衛門。我が取立の詔武士三原有右衛門。勝蔓坂より徐々と供の奴が摺火燈に。煙草燻らせなう有右殿。詞あの騒は山崎の與五郎。成程々々是程の騒に。彼の聲高な幇間の聲が致さぬと。地嘸牛へ息を切つて駈戻る幇間の佐渡七。それと見るより小腰を屈め。詞是は〳〵郷左衛門様有右衛門様。お珍らし所にてア、合點々々。太夫様方が此浮瀬へお出での様子をお聞きなされ。跡を慕うて來たとはきつい心中者め。扨はお聞かせ申したらお腹の立つことがある。今朝俄に與五郎様が吾妻様の身請なさるゝに相談。則ち我等が手附金三百兩持つて參りしに。幸ひに藤屋の亭主が勝蔓の絹屋へ。汁に來てゐられた故金渡して歸りがけ。何いふさ。身共を急かさうと思うて。イヤ誓文でござります。地コレ此一札御寶じませと手に渡せば郷左衛門。披いて見るよりくわつと急上げ。飛掛つて佐渡七が胸づくしをしかととり。詞扨々うぬは憎い奴與五郎と一つになつて。身が武士を捨てさすか。斯様な事もあらうかと。常々汝に物取らせ頼み置いたは何の爲。手附渡さぬ其中に早速身共へ何故知らさぬと。地二人が中に引挾み。鯉口ちやんといはすれば佐渡七は身を縮め。詞ア、成程御尤も。私も其氣が付かぬではなけれども。事急なればお報知も得申さず。そこで我等が分別出して。吾妻様をお手に入れる。仕様をさらばお目に掛けう。コレ此手附請取に。宛名を取らぬが我等の工夫。今でもお金が調へば。宛名をお前に書替へる。何とよござりますか。こりや出來した。それならば此手附の請取に。郷左衛門が宛名を書いて持つてゐる。三百兩調ひ次第われに渡せばよいではないか。成程々々この褒美にはすつしりと。地うゝ合點ぢやと紙入より。ひらりとはずむは清水の。花も及ばぬほん山吹。地黄色になつて曲輪の亭主。息つぎあへず。詞ヤア佐渡七殿爰にか。扨まあ何かは蓋置いて。吾妻を身請なさるゝお客に。今お目に掛りたい。そりや幸ひぢや。則ち彼方が身請なさるゝ郷左衛門様。是は〳〵。私は太夫が親方。ちと密々にお話し申したい事がござります。只今遣はされた手附金。早速百兩封を切つて見ましたれば中は銅。地これ御寶じませと財布

より取出せば。二人もはつと呆れ顔。佐渡七も空惚き。詞私が持つて參つたれど。明けねば知らう筈もなし。エ、憎い奴ぢや。屹度御詮議なされませ。イヤサ出所が知れてあれば詮議もしよい。其方は浮瀬へ往て山崎與五郎殿に。平岡郷左衛門と申す者。それへ參つて御意得うとゆつてくれ。地はつとはいへど底氣味惡く。どうしたらよからうと。胸に思案は浮瀬のフシ路次より外へはづしけり。地曲輪の亭主手をついて。詞金の御詮議なさるゝならばお際がいるでござりましよ。金をお返し申したれば。最前の手附の請取。お戻しなされて下さりませ。成程々々一札戻さうと投返し重ねて此方より手附持たして遣さう。然らば左様。地太夫が身分宜しくと。挨拶述べて立歸る。地二人打連れ路次より直に。フシ座敷に上り。郷左殿。詞與五郎は出ませぬの。イヤサ町人風情でしや勿體。與五郎逢はうと呼ぶ聲に。地何事やらんとあわてふためき奥より出で。詞ハアどなた。山崎與五郎とはお手前ぢやの。身は平岡郷左衛門。先ア、左様ではござれども癸元は他所の事。旅宿へ歸つて金子調達仕らんと。地行くを兩人前後につつ立ち。詞イヤサかういひ掛つてはいつかないかな待つ事ならぬと。地金に事寄せ郷左衛門が。無體も戀の意趣晴し。とやせんかくやと與五郎も。權九郎佐渡七と。呼べども出でず動かさず。難儀の折から南與兵衛。つつと出でて フシ二人を突退け。詞コレお侍。よい加減にもう往なれい。此奴何奴なれば。横合から出しやばつて慮外を働く推參者。ハアハ、こりやをかしい。其横合はわごりよ達。何で身共等が横合。ハハア置かれい。そんなりや其金。何處の誰から請取つたそれ聞こわい。イヤそれは。ヲ、さうぢやあろ。コレ其金の。これなるお身が詮議をする間殿の御用を缺くべきか。なう有右殿成程々々。殊に賀金は天下の大罪。穏便に事を濟すが武士の情。ア、左様ではござれども癸元は他所の事。旅宿へ歸つて金子調達仕らんと。地行くを兩人前後につつ立ち。詞イヤサかういひ掛つてはいつかないかな待つ事ならぬと。地金に事寄せ郷左衛門が。無體も戀の意趣晴し。とやせんかくやと與五郎も。權九郎佐渡七と。呼べども出でず動かさず。難儀の折から南與兵衛。つつと出でて フシ二人を突退け。詞コレお侍。よい加減にもう往なれい。此奴何奴なれば。横合から出しやばつて慮外を働く推參者。ハアハ、こりやをかしい。其横合はわごりよ達。何で身共等が横合。ハハア置かれい。そんなりや其金。何處の誰から請取つたそれ聞こわい。イヤそれは。ヲ、さうぢやあろ。コレ其金の。これなる

與五郎殿より。曲輪へ手附に渡つた金。幇間めと同類になつての。何と胸に應へるか。よう知つてゐる此笛賓。ひつとでもいうて見や。ア、手むさい侍ぢや。イヤサおのれが樣な無理いふ奴には相手にならぬ。コリヤ與五郎。あの樣な金銀を通用する科に依つて。身が屋敷へ連歸り。縛首打つ覺悟せよと。地立寄る二人が首筋攫み左手右手へ踏据ゑ蹴据ゑ。詞縛り首とは汝等が事と フシ極付くれば。詞汝投げたぞよ。地堪忍ならぬと切掛くるを煙草盆にて丁ど受け。又切付くるを搖潛り二人が腕首しつかと取り。詞見りや大事もない侍さうなが。こんな事に刀拔いても可いか。扶持を戴く主の事も。身の事も思はぬの。扨も揃うた智惠なしぢやと。地突飛ばされて顏見合せ。詞いかさま爰は所が悪い。重ねて汝酷い目に逢はしてくれう。地よい往にしほと兩人は。フシこそ〳〵〳〵と立歸る。地吾妻都は走り出で。私や今のもや〳〵で癪が上つた私もと。胸撫下せば與五郎。扨マア禮は笛賓殿。詞何のお禮に及びませう。私はお前の父御與次兵衛樣に。一字を貰うて其昔は。八幡で人に知られたる南與兵衛と申す者。フウ扨は聞及ぶ南方の與兵衛殿か。是は〳〵。それなれば與五郎とも緣者同然。殊に又都殿と譯あると聞いたれば。是以てのかぬ中。地就いては與五郎が。心入にもなる爲なれば。詞佐渡七に遣はせし手附金三百兩。郷左衛門が手に入つた樣子は。ア、成程併し爰は端近。旅宿へ參つて密々にお咄申さん。それならば御酒一つ。イエ〳〵只今はかつ以て。ヲ、堅くろし。與五郎樣もあの樣にいうてぢやのによいわいな。イヤ〳〵都さうでない。今日は一日のらかわいたれば。まつと商せにやならぬ。笛が賓れぬと往んでから咽がぴい〳〵鳴るわいの。來たこそ幸ひ清水の觀音へ參つて歸りましよ。地皆樣さらばと南與兵衛。荷を打擔げ別るれば。三人打連れ浮瀨の フシ元の座敷へ入りにける。地始終立聞く手代の權九郎。幇間の佐渡七小手招き。詞今のを聞いたか。扨憎い笛賓め。彼奴が大方都がきだん。南與兵衛めに極つた。何處に何時からをつたやら何もかも皆知つてをる。地あの位なら此方等が事も親方へ吐すであろが。どうしたらよかろうぞ。詞コレ權九樣氣遣ひせまい。此上の浮瀨に今の侍衆がゐらるゝ。賴んでばらして貰はうか。よかろ〳〵サア來いと。尻引搦げ清水の坂をしどろにへ上り行く。フシかくとも知らず南與兵衛。觀音へ參詣し賓殘りの笛賓つて往のと。舞臺の上に荷を下し。子供集める曲笛の高音も風もひいやひや。ひしいでくれんと權九郎佐渡七。つ

つと寄つて南與兵衛が。兩の小腕しつかと取る。詞最前おのれは侍衆によう慮外ひろいだな。地目に物見せんと捻付くる。心得たりとはり退け打据ゑ。詞又立上つて取付く二人が腕捻上げ。右と左へもんどり打たせ。朸追取り脊骨肩骨フシ薙立つれば。地思ひ掛けなき後より郷左衛門有右衛門。物をもいはず切付くる身を撥沈み持つたる朸で丁ど受け。詞ヤアだまし斬りとは卑怯者と。拂へば付入り付込むをばつしと彈き。地飛んづ跳ねつ働けども相手は四人に我一人。朸も難なく切折られ。笛を釣つたる傘追取り拔けつ。滑つつ受流しては後退り。詞隙を窺ひ勾欄に。飛上ればどつこい遣らぬと切込む拍子。地舞臺をひらりと一飛びに飛んだる傘に。風持つて。コハリ次第に下れば ナホス 舞臺には。二人の者が口あんどり。傘を力に南與兵衛畠の中に下り立つて。舞臺を見上げ。うつそりども。それにゆるりと。けつかれとどつと笑うて畔道を長町指。して 三頭へ立歸る

第二　相撲の花扇に異見の親骨

詞茶を參れ〳〵〳〵。中入迄の勝負附。かちまけの勝負附〳〵と。地重言多き。賣聲も。地高臺橘の南詰。今日七日目の大相撲最扇々々の玉の汗。濡髪最扇打混ぜて芝居張裂く繁昌に。扇の花は雨と降り。羽織もぼいと堀江中。佛浮出る阿彌陀池。フシ人の浮氣は嘸あらん。地フシ濱端へ。掛出す茶店札賣場。コハリ川は御座船幾何艘。地木戸は大入明日御出の張紙や餘る見物横町筋。竹の行馬に立留り。編笠着たる七賢人。殘り多げに寄集り。調何と甚い大入。今の聞聲が中入さうな。どうでも濡髪勝ちますの。七日が間土付かず三ケの津の前髪。第一立身取。左でも右でも指したが最期。こりや〳〵と持つて出る。留めると。捻るか地或は無双と フシ仕方話に連の男。詞何と大山と相引は何方が強かろぞいの。いや今日は關同士取らぬげな。ア、何方にやら痛みが出來た其代りに。下の屋敷の抱相撲。濡髪ととらしてくれと。どれやら大身な侍衆の所望故。勸進元頭取方が濡髪に段々の頼み故。是非なう一番取るげなの。ヤ是は見たい勝たしたい。あれ〳〵辨當口が透いて來た。地此間に割込も押込もとオクリ皆々へ打連れフシ急ぎ行く。地川風にフシ天幕閃く石疊。堅い約束變らじと。本フシ吾妻都がフシ物思ひ。浮かぬ君達勸め込む。長地船の一字の讀聲や皆一樣の襠は是ぞ龍頭鷁首と。フシ橋行く人も行き惱む。地引舟外山が上調子。詞爰らがよかろ舟留めて。まだ相撲は果てまいか。太夫主一つ上りませ。市彌お銚子〳〵。

あいの返事も。ヲヽそれ手元見や口かちぢよろ〳〵出るわいの。一つ上れ氣が浮かぬと　地いへど吾妻は浮かぬ顔。　詞イエ〳〵酒置いて貰ひませう。それはさうと都さん。與兵衛樣はどうぢやいな。日外浮瀬のやつさもつさ。皆貴方のいかいお世話。あの樣な男氣な立派なお方に五郎樣をあやからしたい。今日も首尾してちよつとお出でと文に委しう知せしに。今において便がない。それで可笑しも何ともない。　地但しは舟で來てゞはないかと。見廻す向うの紅梅に。ちらりと見えし與五郎を。都は見るより小手招き早う〳〵。　詞コレ外山主五郎樣の舟へ吾妻樣を貸しまして。ちやつと〳〵に　地氣轉の戸山。舳先に立つて舟の綱。ヲシ結び合して。　詞サア吾妻樣御越と。　地呼ばれて嬉しさ機嫌も直り。五郎樣何故に遲かつたと。問はれて與五郎されば〳〵。　詞先刻にから此舟へもう往かうか〳〵と思うては居たれども。惡者の鄕左衞門。有右衞門めが家來共を見え隱れに付置いて。浮瀬の意越晴し。サア弱い者は歩に取らるゝ。とかういふ中にも氣味が惡い。長五郎が相撲しまひ次第來るであろ。彼が來れば千人力。あの濡髮は此方の親父の大氣にいり。地體は家來筋なれば身請の相談

諸事萬事。此中から頼んで置いた。追付け芝居も果てるであろ。委しい事は明日の晩。地見付けぬ中に早う往にたい〳〵と。元來正氣おぼこ育に氣の急く都。詞コレ吾妻主。あの舟へちやつとお乘り。それから恨みなり拗ねなりと。地早う〳〵に外山も共に。詞あれ〳〵相撲が始まるやら柝が鳴る。お仕舞ひ次第に早うお歸し。それ〳〵此方等は酒にせう。此都が行司人。西は五郎様。東は吾妻主。地やつと取つたり障子をぴつしやり。さすが曲輪の手なれども。フシ惡所仲間ぞ頼もしき。地芝居はさわ〳〵賑ふ聲 フシ風が物いふ名乘聲。詞小松山〳〵〳〵。此方神樂々々神樂。地どよみを作る見物に フシ札賣る男も走り行く。地東の方からいきせきと歩み來るは與五郎が父親。東からげの山崎與次兵衛。年は六十二か三か始末親父のかたくな者。荷持丁稚も遲れ足縺跛ちが〳〵泣面抱へ。詞申し〳〵親旦那様。些お休みなされませぬか。肩も足も堪りませぬ。エ、きたない奴ら。道なら只七八里山崎から一息。晝休みは北濱のお屋敷これも立ちながらつい爰迄。それにちよこ〳〵休んだら茶の錢も堪らぬ。幸ひ爰に茶店些の間休まさうと フシ床几に掛かればアイお茶上りませう。詞イヤ飲

みたうござらぬ火を借るばかりぢやぞ。わいら渇くなら飲め。徒茶飲むな腹が損ねるぞ。イヤ亭主相撲はきつい繁昌追付け果てますか。イエ〳〵今面白い最中。今日は濡髪と。ア、どれやら屋敷方の抱相撲との所望ある筈。ちと御見物。札一枚が六十八文。中木戸が七十八文。おつと待つたり。ドレそこな十露盤貸したり。サアいうたり。エ、札が六十八文。これが三人で二百十二文よ。中木戸が七十八文。これが又三人で二百四十二文。中桟敷が七百六十。ヲイ七百六十。上桟敷が一貫八百。ホイ。一貫八百。これに酒が小半。マア三十よと。蛸の足一本が八文。三太めが小豆餅が十で十文。コリヤ久三わりや下戸か。ハイ酒も餅もよござります仕舞うた。此奴がかいぜで二十よ。惣〆三貫八十二文。これに目が四文こりや目が出るよしにせう。わいらもよう心得て銭徒に使ふな。三貫八十六文大抵では儲けられぬぞいやい。此銭を使はずに一つにして濡髪に遣れば。結構な正月どが出來る。ま些休んで評判聞けば見たも同然 地フシどれ茶一つといふ折から。 地忙しさうに白襷に卷物十本青縞十貫樽肴。進上札の立派な手代。やれ往け〳〵えいさつさ笹まめこと。行過ぐるをば目早の興次兵衛。早くも見付け。詞こりや〳〵〳〵庄八。々々と 地呼掛けられて喫驚り敗亡。詞ハイ親旦那興次兵衛様。お駕籠にも召しませず何處へお越し遊しますと。 地大地に三つ指氣の毒顔。詞ハ、ア遣るわ〳〵。笹まめこ。味やるわ、ヤイ興五郎めは何處にをるサア。有様に吐しをれ。地體此番頭の權九郎めがうつそり。此度の爲替銀の事につき。おれが直に來る筈なれど折節悪う持病の疝氣。それ故にこりや權九郎悴ばかりは心元ない。其方が屋敷々々の勝手も知る。萬事氣を付け見習はせよ埒明き次第連歸れ。隙がいる程大阪の水に味が出來ると。底の底まで念を入れ。今日戻るか。明日は歸るかと待てども〳〵いかな事。此月で丁度足掛け三月。人をおこせばイヤ屋敷々々に御用が出來た。イヤ爲替銀が埒明かぬ。明かずは明かぬやうの議論をしてなぜ歸らぬと。 地目先の舟。見ても見ぬ顔そ知らぬ風。詞コリヤやい此様に隙のいるのは尤も。新町の傾城共に。鼻毛讀まれる興五郎め。權九郎めも汝めも。踊り狂うて笹まめこ。コリヤ。山崎から爰迄一人前三十で乘合に乘せる。三人で九十。それ程の銭惜むではなけれどな。一文でも費な事に遣ひ果せば銀の冥加といふもので。思ひかが行かぬものと。皆悴めが不便さに始末するわい。内に居ればうそ高い金魚だらけ。あの金魚が何の役に立つ。唯はれはせず

沙魚より劣り。外へ出づれば手放かけ。其大分の進物ども大抵の銀目ぢやない。錢三十の乗合にさへ得乗らぬ親。御子息は大方あの様な屋形舟に乗り散らし。お山と一つ所に酒を飲み。笹まめこうで地あらうがなと。舟を睨めつけ〳〵て。詞サ與五郎め連れて來い。サア往け失せろと迫立つる。地舟の内に吾妻がハア〳〵。與五郎はフシ夢になれとぞ蹈み居る。地庄八見るより即座の間に合ひ。詞イヤ若旦那は先程中入まで見物遊ばされ。いかう頭痛して目が眩ふ様な。是では堪らぬ。定めて。親父様もお待兼ね。鬼角親父様に早うお目に掛かりたいと。駕籠に乗つて直ぐに山崎へお歸り。私も御供と存じたれば。いや〳〵汝は此進物どもおれが遣るのではない。藏屋敷より託づた。長五郎へ渡し請取とつて屋敷へ渡し。地跡から追付けでござりますとフシ間に合はすれば。詞ム、何ぢや。與五郎は病氣故山崎へ歸る。其進物は屋敷のぢや。ハイ。左様でござります。ム、それならそれにして置く。慥にさうか。いやモロも腐れ。えいわ病氣とあれば是非がない。幼少い時からの虫が直らぬものであろ。是から夜通に遣つてくりよ。したが此奴等が足が立たぬ道から辻駕籠でぼつ立てう。コリヤ庄八。長五郎に逢うたらおれも些用事があつて下つたけれど。與五郎が病氣故折歸りに往ぬ。相撲しまひ次第見舞ひがてら來いといへ。今日も下つた序に中風の藥で。相撲も見たけれど錢がたんと入りもする何やかで往ぬ。此方へ來たら村中の若い者共寄せて。錢要らずに取らして見よ。嫁のお照も喫驚せう。權九郎に逢うたら。銀の事首尾して早う歸れと地いへと。かきたくる程いひつけて。詞ハアまだ忘れた。其進物の序に此扇一本。今朝卸した十二本の加賀骨。要は象牙花ぢやというて長五郎に遣つてくれ。いよ〳〵悴は病氣ぢやな。ハイ。いよ〳〵藏屋敷のぢやな。ハイ。地慥にさうと舟の内。肝腎要の所をばいはぬ心の親骨はフシ疊み込んでぞ歸りける。地庄八ぽつと吐息つき。若旦那お聞き遊ばしたか。聞いた段ではない發明々々。ほんにまあ庄八主いかい働き。もう私や怖うて顫うてばつかり居たわいなア。何卒庄八濡髪に逢うて。太夫が身請の事頼んで。今夜中に往なずは又喧しかろが何とせう。そこらは庄八呑込んでをります。先づ此進物を濡髪へ。あれ〳〵名乘の聲がする。地諸事は後程々々とフシ大木戸指して行く内に。詞濡髪〳〵〳〵。放駒〳〵〳〵。是今日の結びの關と。地内外の評判とり〴〵に。何方が勝つか知らねども一度にどつと鬨聲。木戸はもやつく果太鼓明日も疾うからどんからの。

音に揉まれて諸見物潮の湧くが三更へ如くにて。フシもやつく中に。詞サア〳〵吾妻様ちやつと〳〵。郷左衛門有右衛門様追付け爰へ。地見付けられては大不首尾。早う〳〵に綱解き フシ舟遠さけてゐる所へ。地見物群集に打交り平岡郷左衛門三原有右衛門。問屋の手代が御供にて跡に附添ふ角前髪は。大寶寺町の一番息子放駒の長吉。數多の見物押合ひへし合ひ。あれが屋敷の抱の相撲。よう關取様。見事な勝出來た〳〵に煽ぎ立て フシ濱際。さして送り來る。地郷左衛門舟よりも。詞コレ〳〵放駒關取々々と地招かれ船へ飛び乘れば有右衛門。詞長吉きつい勝。郷左殿。吾妻殿の身請の儀も。金の工面埒明く瑞相。與五郎めが腰押の濡髪に勝つたは目出度い一つ飲も。イヤ此郷左衛門が思ふ壺。飛入りといはゞ長五郎めが立合はぬは定の物。其所を拔からず町人の長吉を抱の角力放駒と僞り名乘上げたればこそ。今の角力勝つたは手柄。いよ〳〵太夫が身請の世話も頼入る。いや爰は船中。地諸事は座敷で船遣れ〳〵。はつと心得 フシ船押出せば。地與五郎吾妻互に。頷く顔と顔。遠ざかつても離れぬ思。契りも深き堀江川。フシ別れてこそは行過ぐる。地與五郎も氣詰りと船より上り跡見送り。詞コレ船頭。おれは徒歩で往ぬ程に迎をおこせと。九軒の井筒屋迄いうてたも地ハア、心得ましたに オクリ船押へ切つて フシ別れ行く。地木戸口よりも濡髪長五郎。評判一の角前髪。大郡内のふとり肉鮫鞘さすが關取と。フシ一際目立つ。男振り。地與五郎見るより。詞長五郎〳〵まあ〳〵爰へと。地茶屋の床几に招かれて。詞ホ、若旦那爰にお出で。コレ茶店の一寸頼まう。あれ〳〵〳〵向うへ行く船に追付いておれが名はいはずに長吉殿に急に一寸お目にかゝりたいと。誰やら待つてござるというて返事聞かして下されい。近頃大儀に地はい〳〵と フシ其儘走り行く跡に。地濡髪最屑の與五郎。マ、腰掛きやかゝつた事ぢやない今日の角力おれは力がとんと落ちた。太夫も今迄彼の客と船にゐたが。力落して今往んだ。郷左衛門や有右衛門めが放駒を譽めくさる胸の悪さ。吾妻身請の事埒明く吉左右と悦びくさる。おれも船へ飛込んで存分いはうと思へども彼方は强しおれは弱し。兎角吾妻が事が苦になる上。其方は負けるこりやまあ如何せうと。地むしやくしや腹の詞を押へ。詞イヤお氣遣なされますな。相撲は放れ物。負けたが負け。先程圧八殿のお目にかゝり。親旦那の噂殘らず聞きました。先づお前は宿迄お歸り遊ばされ。金の工面なされませ。五日や十日隙いつても濡髪呑込んでをりま

す。脇の手へやる事ぢやござりませぬ。改めて申すに及ばねども。私が母者人はお前のお袋様の召使。私は八幡邊から養子に貰はれたげにござります其お袋様もお果て遊ばす。母も病死其上段々お世話に預りし大恩の與次兵衛様。その若旦那のお前長五郎めが命のあるうちは。吾妻様の事世話致さいで何と致しませうと。地詞半へ茶店の亭主。詞申し長五郎様。長吉様がそれへ參るとでござりますおつと合點。サア／＼お歸り。コレ亭主。又頼も。此お方新町まで送つて上げまして。追付けそれへ參ります。地隨分早うと與五郎は。ヲシ亭主打連れ歸りける。地早や暮近き濱側の。茶店日當に放駒。慌かこゝらとヲシ見廻せば。地濡髪見るより。詞イヤこれは御苦勞。サア／＼爰へ／＼と。地招かれて放駒。詞エ、一寸逢ひたいとのお使は濡髪殿。こなんでえすか。成程々々此長五郎。些其許へお頼み申度い事もあり。又外にお話致さねばならぬ事サ、サ是へ／＼。いかにもと。地互におれそれ床几に並び。腰打掛ける前髪同士。四角な十の二枚物。ヲシすは事こそと見えにけり。詞イヤ長吉殿。お名は節々聞及べどしみ〴〵逢ふは今日の相撲。扨きつい身鹽梅小手の利様。へゝ何とごんすか。イヤモけうとい達者。イヤ／＼。コレ長五郎殿。何やら話したい事があると人をこしたは其事でえすか。いや／＼。頼む事は外の事でもない。今日の棧敷のお客ナ。お侍さうな。アイ。さうでえす。それが何とぞしたかな。イヤ何ともせねども其お客が。此間新町の藤屋の吾妻を身請の談合。其吾妻殿には。先からの馴染。即ち我等が親方筋。若い人なり殊には部屋住み故身請の金ごと。我が物で我が儘ならず。此金のたんぞくする間も今四五日。其中に貴殿の方のかのお客に請出されてはと其所が今の若い同士なり。何ぞ言交した詞が立たぬとやらいふやうなむちやくちやした事があるさうなぢや。そこで私は家來筋の事なり。コリヤ長五郎。彼方へ遣つてはおれが立たぬ。汝どうぞ先の客に逢うて斷いうて。此方へ請出さして下されとほんの子供のやうな若い人。私ぢやというて近付ではなし。何とせうと思ふ折柄貴殿と今日の立會。これは幸ひ大阪同士若い同士。其お客のお氣に立たぬ様にそこらをなコレどうぞ。イヤこれ。／／／長五郎殿。詞半ぢやが。こなんのいはんす親方筋とは。山崎の與五郎殿の事でえすか。いかにもよく知つてぢやなア。知つてゐやんす。其與五郎殿の事について。吾妻殿の身請の相談。私も又成程侍衆に頼まれ。金の工面するうち。與五郎に請出されては立たぬ程に長吉頼

む。金の才覺する間脇へ遣るな。殊に向うには濡髪が肩持つ程に。汝を頼むと頼まれます。私も亦與五郎殿とやらと吾妻殿ばかりなりや。侍衆に斷いうて。イヤそんな世話はいやでござるといふまい物でもないてや。愁か濡髪が肩持つと聞いたによつて。どうやら長吉が濡髪が怖さにへり口いうと思はれるも面倒なり。又友達仲間もそんな物ナ。さうぢやどんせんか。ム、。天晴男。ぢやが。其所ぢやてえ。何處でえす。イヤ其所が男同士。平押しに頼みたい事あればこそ今日の相撲。放駒と名乘を上げた。見れば長吉殿こなんぢや。これはよい所と否應なしに立合うたはア、置かしやれ言はしやんな。そんなりや。この長吉に此事を頼みたいと思うて今日の相撲をえいやうにしたといふのか。イヤさうではない。イヤ〳〵。ふつたのぢや。おれがめんような貴樣は評判の取出し。どうで子供弄るやうにするであろ。おのれ左指いたら。喰付いてなと遣つてくれうと思ひの外。ヤツトいふとする〳〵持つて出た。其中に團扇は上る。合點行かぬと思ふたがふつたのぢやの。投げるなら投殺して置いて。又改めて頼む事なら面白い引きはせぬ。其樣な人に物遣つて跡から金の無心いふやうな。むさい長吉ぢやどんせぬ。めい〳〵の心に引較べ。へゝそりやもう慮外ながら。お關取には似合ひませぬ。イヤ長吉殿。さういはんすりやいかう爰で喧しなるぞえ。喧しなつたら何とするえ。されば さ。與五郎殿と其侍衆とが。めつきしやつきになる所で貴樣と私とが立譯。まだ半分道も行かぬ中爰で互に言ひ合うたり。打つたり蹈んだりするは喧嘩の地取するやうな物。其方の身請も今日明日に埒明くでもなささうな。今四五日の事此方も二三日には埒する筈。どうぞ。ナ貴樣を頼む其方の。金の隙いるやうに。エ、どびつこい。其樣な工面仕か邪曲者のいふやうな事はいやぢや。叶はぬ迄も其時になつたら腕づく〳〵。邪曲商賣いやでえす。イヤ長吉殿。長吉よ。餘り頤がかき過ぎるぞよ。與五郎殿の事については。長五郎が命でも差上げにやならぬ筋があればこそ。男の手を下けていふのぢやないか。それをおれが知つたかやいサ知らぬによつていうて聞かすのぢや。モウえい頼まん。聞分のない者に物いふは放駒の耳に風。隨分侍の腰おせ。そりや知れた事。是から内の商も構はず。姉者人が勘當しらりよと儘よ。隨分貴樣の邪魔せうわい。ホ、侍が拔いて切掛けうが。何奴が拔いて掛からうが。額に濡髪。鎖鉢卷より慥かな請人。ハ、切悪かろ。ム、まだ鞍味知らぬ放駒。人中で馬

乘に逢うた事がない珍らしう蹈まれて見よわい。見るか。ヲ、見る。地見せうと互に。悪口睨合ひ。思はず立つたる茶碗と茶碗。フシ手に持ちながら。コリヤ長吉。詞此茶碗のやうに物事がナア固う往けば重畳。長五郎。長吉と。此様に破れたれば。ハテ繼がれぬ角ひし。重ねて。〳〵。地別れて。こそは 三度歸りけれ

第三　揚屋町の意氣づくに　小指の身がはり

地寂光の都は爰ぞ。四筋町九軒常夜の闇を照らす。フシ井筒が元の賑しさ。地數の菩薩の來迎と五百羅漢の末社ども。紫磨黄金の肌を目がけ。我も〳〵と入來れば。客は卽身成佛の　フシ帶紐解いて大騒ぎ。飲めや唄への責念佛願以此功德醉ひつぶれ。屏風の涅槃に入るもあり。實に新町を西々と彌陀の。御國をいふ如く。救ひ取られて粹となり悟。フシ開かぬ人もなし。地騒の内に吾妻と都。頷き合うて座敷を拔出で。詞コレ吾妻様。私が身には雛儀が掛つた。せつないことが出來たわいな。アノ嫌な權九郎が。請出すというて親方と相談。年も僅か一年足らず。談合しめて二百兩。今宵持つて來たといな。マア如何したらよからうぞ。地思案して下さんせ。詞思案というて急な事。與兵衛様は知つてかえ。サア昨日八幡へ飛脚を遣つて今日見える筈。用が出來たか今に見えぬ。スリヤ差詰め駈落ちやわいな。何いはんすやら。お前程駈落々々と。駈落して後がつまるかいな。サア詰らぬからの駈落。私も郷左衛門が放駒を連れて來て。百兩の手附を渡そといふ。これも與五郎様から。今夜手附の渡るを聞いて。僅か渡して邪魔する思案。ひよつと山崎から今宵中に見えさ。どうせうぞいな都様。ヲ、あの様は。私が事を相談すりや。お前の事をまんがちな。ハテ悲しければ身一心。餘所の事には手が屆かぬ。此與五郎様は遲い事。地此まあ與兵衛様は何してぞと。フシ同じ思も限り前。地幇間仲間に大事と廓中は上を下。騒ぐ中より駈戻る亭主利八。詞コレ〳〵太夫様方。大きな事が出來た。大門で幇間の佐渡七が切られた。そりや誰にえ。誰を知つてよいものか。さすがの我等も存ぜぬ〳〵。さりながら。追付け捕へるよい手がかり。お前方にもいうておこ。佐渡七めは大擲。死ぬるというても只は死なぬ。相手の小指を一寸程喰切つて衛えてをる。檢使のお役人の仰には。是は大抵の悪者でない。相手は殺すまいと思うてか。いづれも擦傷。指に喰付かれた故是非なう殺した物と。それは〳〵細い見やう。とかく指の無い者が殺人と。廓中を指改

め。地此方の客も。何時詮議に見ようも知れぬ。詞ヤア夫に就いて都様。奥にござる權九郎様のお頼で。お前の身請さつぱりと埒明けて置きました。今夜でも。手を引合うてお出なされ。祝うて一つ食べましよかい。ヲヽ、利八様の嫌らしい事いはんす。アノ權九郎のどぶつに。請出される事嫌ぢやぞえ。イヤそれでは濟まぬ。地體權九郎様といふお方は。吾妻様のお客の。與五郎様のお手代。親方と違うて大ねだり者。いつぞや浮瀬で。何やらもやく〳〵した事もあつたげな。それから減多に請出す相談。それは格別。今いやと仰しやつてもいはしては置くまい。斯うなされぬか。幸ひ吾妻様の事について。郷左衛門様や放駒殿が。親方を呼びに遣つて置かれた。密かに親方に逢うて。一年足らずの年を。二年にもしませう程に。請出さして下さるなと頼んだら。呑込むまいものでもない。つい嫌とばかりではすまぬぞえ〳〵。いか様さうぢやわいな。そんなら往て頼まうかい。一時も早うお出で。我等も傍から相槌。地サアごさんせと フシ引連れる。詞コレ都様。序に私が事も頼むぞえ。ヲヽ、それも合點と行く跡に。地同じ思の吾妻が案じ。あの身になつたらどうせうと。フエ思ひ悩みて フシゐる所へ。地頬冠にて顔隠し。駈來る男は南與兵衛。息を切つて。詞コレ其所なは吾妻殿ではないか。誰ぢや與兵衛様か。テモよい所へござんした。都様が待兼ねて。イヤコレそこ所でない。幇間の佐渡七めが。大勢の非人を頼み待伏せ。とつて抑へる拍子。小指をくはれて是非なう手に掛け。逃出ようも門は締めたり。何卒暫く忍ばせやうはあるまいか。ヤレ聲が高い 奥へ郷左衛門や放駒も來てゐる。お前と敵同志の權九郎。皆佐渡七最屓の悪者。とはいへ氣遣ひさんすな。地清水での恩もあり。私が隠匿うて上げませう。市彌來いよ。あいと返事も長々と。走り來れば。詞コレつい爰へ床取りや。エ。はて貴方と二人ねるわいの。あい 地とはいへど子供氣に。フシ不思議立ててぞ入りにける。詞イヤ吾妻殿。さうゆるがせな事ぢやない。じやら〳〵とお弄りなされずともちやつと〳〵。ハテ女郎の寢間は。お侍様の城屋敷も同じ事。屏風一重が。鐵の楯とやらぢやわいな。地女郎の手管はこんな時と いふ間に禿が夜着蒲團枕二つに煙草盆。詞これでよいかえ。ヲヽ、三味線おこし奥へ往きや。地あいと差出す唐桑の。胴のよいのを頼みにて。與兵衛は暫しの隠れ家と。フシ夜着引被き身を隠す。地吾妻はしやんと腰打掛け調子合して彈きかける。三筋の糸は細けれど。心は太き一節に。歌身を捨てる。里あれ

ばこそ浮瀬の。ナホス 地 三味線半へ駈來る都。コレ吾妻殿。詞今市彌が話で聞いた。其方は與兵衛樣を色にして。與五郎樣や私が手前。顏の皮が千枚あるか。歌あるを頼みの憂き勤め。詞コレ三味線彈いてぬからぬ顏おきやいの〳〵。引出して赤耻かゝそと。地すつと寄つて寢床を。引搖らんとする所を。ちやつと押へて。歌渡り競べて名を流す。詞ヲ、其名を廓中へ流さうと。地又取掛るをコレ都さん。詞さう急かんしては何にもいはれぬ。こりや與兵衛樣ぢやない外の色。顏見せる事マアならぬ。ハ、、。隱したとて隱ささうか。外の色なら猶の事。見掛つた顏見ずに置かうか。地其所退きやらぬと是ぢやがと。煙管を取つて振上げる。詞マ、これ是非見たかこれ見やと。地與兵衛が片手の切れた指。引出し見せれば都はびつくり。詞ア、此指は。コレ大門口で是程に。心中立てゝ下んした與兵衛樣。色にしたが誤か。但しは突出し世間へ見せうか。サア〳〵どうぢや都さん。コレ〳〵誤つた大事の。〳〵男故。氣が廻つて疑うた。よう色にして下んした。地コレ手を合す何事も堪忍してと詫言の。聲が洩れたか權九郎。詞都其所にか手が悪いと。地いひつゝ出でて。詞コレ吾妻殿聞いて下され。私がよく〳〵に思へばこそ。今親方の手前不首尾でゐても。二百兩といふ金を出す。亭主を頼んでさらりと埒の明いた後で。女房になる事はならぬ。嫌ぢやと跳ねきられ。お乳の人の。乳ふつつりに逢うて手も足もない。地何卒其許のお世話で。コレ得心させて下され。一生の御恩忘れは置かぬと。フシ三拜九拜其間に與兵衛が蒲團の下より。吹込む品を吾妻は呑込み。詞イヤ權九郎樣。都樣の合點のないは。是迄お前の。仕樣が悪いでがなあろ。イヤもうよいも悪いも。遂に〳〵按摩取ろより外。手を指いた事もない。イヤイナ。悪いといふは浮氣ばかりで。地眞實可愛いといふ心中が。見えぬによつてどがなどさんしよ。詞ヲ、あの吾妻樣のいはんす事わい。其心中立が猶嫌ぢやわいな。コレ〳〵都樣悪い合點。貴方が心中に。指でも切つてくれる氣ならナ。これな。夫婦にならうといはしやんせ。ぢやがそれ程にはあるまい〳〵。いやそりやはや女房にさへなつてくれるなら。腕なりと股なりと。地望み次第に指でも切らう。詞アレ聞かんせ。指でも切ろといな。サそれが猶。コレ指がないと。可愛代りになるぞえ。ハア、さうぢや。コレ權九郎樣。地私をほん〴〵に思うて下んすなら心中に指。ナ吾妻樣。ソレソレ。そりや易い事。二百兩棒に振ろより指一本。望み次第切らいでならうか。イデ

地目の前でと。枕を盞に脇差を。當てごとは當てながら。迷惑さうにもぢ〳〵うぢ〳〵。詞どうやら今夜は切りとむない。胸が踊る蟲が騷ぐ。地エ卑怯なおさんと二人して。手取り足取り枕を槌。ぱつしりいはせばあ痛しこと。轉ける間に指拾ひ。其血を直に脇差へ。押塗り〳〵。フシ鞘にうつして出來た〳〵忝い。詞爰な心中男めと。地しとゝ打たれてにつこりと。痛い笑顔に二人とも。フシ堪らずどつと打笑ふ。地折柄來る所の役人。亭主は居ぬか。亭主々々と呼ぶ聲に利八は駈出で。はつとばかりに蹲踞る。詞大門口にて人を殺した相手の詮議。客どもへ言聞かせよ。先づあれなるは何者。則ち彼方もお客でござります。ム、町人さうなと傍へ寄り。サア其方兩手を出した。エ。指を吟味する兩手を出したさ。ハイ。利八何の事ぢや。成程お前は合點のいかぬ筈。今宵大門口で。幇間の佐渡七が殺され。口に指を銜へて居る。指のない者が相手とあつて御詮議。何の事はない。手を廣げてお目に掛けられませ。何ぢや。そりやどの指が。改めた所で慥かに小指。エ、。あの小指が。ハテ扨此奴きつい仰天。ソレ家來ども吟味せい。地畏つたと引捕へ。屈める腕や指先を。引出し見るより。詞扨こそ此奴に小指がない。其奴くゝれの下知の下。地捕つたと投げて掛ける繩。詞アア申し。これには段々申譯。私は山崎與次兵衛が手代。權九郎と申す者。此里へ通ひたつた今。あの女郎に何がなんと。ハイ〳〵。あんまり阿房らしうて申兼ねます。コレ二人の衆。爰へ出て言譯して下され。アノまあいはんす事わいの。私らが言譯で。地濟まうとも思はぬナ利八樣。詞ハテ相方の女郎は女房同然。緣者の證據で役に立たぬ。何卒私が言譯して上げましたい。ヲ、それ〳〵。思ひついた事がある。人切つた脇差と。指切つた脇差は血のしたひで忽ち知れる。地これが證據と脇差を。拔きかけ見るより南無三寶。詞鞘の内迄血だらけ。これではどうも言譯立たぬと。地聞いて役人。詞イヤそれ迄に及ばぬ。山崎與次兵衛が手代權九郎なれば。外に御詮議の筋もある。地屋敷へ引けと引立つる。小事は大事の基となり。蟻の穴から堤とはオクリ後にぞ思ひ知られたり。地蒲團引除け南與兵衛。詞扨吾妻殿のお働き。お禮の申し樣もない仕合。今思へば幇間風情を。相手にして遁げ隱れ。さぞ腑甲斐ない卑怯な者と。思召しもあらうが。地年寄つた母持つては。何處ともなしに後髪。思はず未練になりましたと。語れば吾妻も。詞サア私も。ほんの父樣があるげなけれど。遂に逢うた事もござんせぬ。地腹の立つ時は思ひ出すがよい藥。

詞マア都様一間へ連立ち。身が儘になつたこそ幸ひ。打解けてナ。打解けて往かんせなう。地そんなら何かの禮は後にへ。詞先づ人の見ぬ内と。地與兵衛も挨拶そこ〳〵に。フシ伴ひ一間へ立忍ぶ。地吾妻は人の世話ばかり我が待つ人はと立つたり居たり。焦るゝ念の通じてや。山崎より與五郎。濡髪引連れ太鼓過ぎ。足を早めて入り來れば。詞ヤレ待兼ねたお前も氣が急こ長五郎様。地よう連れましてと挨拶も。フシ心一杯禮ならん。詞イヤモウ。若旦那の足元きついもの。駕籠では遲いというて飛ばれた〳〵。サア其飛ぶ跡から濡髪が急ぐ足音。どうづきするやうで一倍飛ばねばならぬ。扨まあ聞かう。郷左衛門が手附を渡すと。いうてお越しやつたがさうか。サア文でいうて遣つた通り。お前の方から手附打つと聞いて。放駒を頼んで金の才覺。やう〳〵と長吉が。百兩調へて持つて來て。多い少いと親方と詰開き。地あの百兩が渡らぬ内に。此方の手附が渡したいと。それでいかう待兼ねた。詞もう先刻にからせりふも濟んで。金渡したか其所が氣遣ひ。フウ。長五郎どうせうの。大事ごんせぬ〳〵。今夜の夜明迄に此方からの手附を渡そ。それ迄外の手附を取りやんなと。親方に底入れて置いた。僅か彼方は百兩。此方は三百兩。高が長吉づれを頼んで。金拵へて貰ふやうな侍。跡金の五百兩が何處から出るもの。イヤさうもいはれぬ。あの郷左衛門めは大工面仕。お國から米が登ると。それを賣拂うて。直に請出す手筈ぢやげな。ア、それでは首が飛びますわいの。イヤそれでも氣遣な。よごんす。それ程氣遣なら此三百兩渡して來う。地幸ひ親方も來てゐる。詞又長吉が來てゐると聞けば。渡すにも張合があつて面白い。吾妻様些の間。休まして置いて下さんせ。遠道の草臥れ。地よう摩つて上げましてと。戀の譯知り色知りて。フシ濡髪とこそいふやらん。地吾妻は四邊見廻して二つ枕の敷蒲團。これ幸ひとコレ與五郎様。詞彼所へ往て寢よ一寸ごんせと。地手を取れば置かしやれ。詞此間は揚詰。帶解くに飽いてゞあろ。明日からは我等が買分。先づ奥へお出でなされ。侍の餘り物食べぬ〳〵。コレそりや何の事。郷左衛門とお前といつぞやの揉合から。十日づゝ分けての揚詰。それでものの二日。逢はぬ夜はないぞえ。あの客も今夜限り。明日からはお前の日柄。一時と二時と早うねたれば罰が當るか。地私や勤の始めから外の客のはだ知らず。お前とねれば サハリ心とけ肌着の。袖のてを抜いて。はだとはだとを合はさねば。ねたやうにない私が氣を。知つて居ながら

悪口にも。帶とくに飽かうとは。そりや餘りなおしやんしやう。外の客に帶といて。お前の心は。ナホスフシ濟むかいなア。地濟むなら濟ましておかんせねて貰はいでも大事ないと。ひぞりかけられむつと顏。詞さういふからは此方も意地。何ぼでも寢所へ往てねてくれうと蒲團の上。ころりと轉ければ。エ、其口が猶憎い。ねさしはせぬと引捲り。ともにそひねの木枕は。フシよいなかだちと見えにける。地流連の鄕左衞門。始終を見すまし。何でも此奴よい料理と。飛掛つてはつたと蹴飛ばし。これはと起きる與五郎を。取つて捻ぢ据ゑなうこれと。縋る吾妻を跳飛し。詞ヤイ爰な大ずりめ。身が揚詰の女郎。一夜妻とはいひながら。女房同然。目を盜むは密夫。不義者め盜人めと。地腕の骨の續くだけ。引廻し〳〵。捻付くれば吾妻は悲しく。詞コレ鄕左衞門樣。め。お前の揚詰も今日きり。明日からは與五郎樣の日柄。限の太鼓打ちたれば。明日の客を勤めるが此里の習。元より貸借といふ事もあるぞえ。無體な事を言掛けて跡で難儀をさんすなえ。ヤアぬかすな。此鄕左右門田舍者。此里の習ひは知らぬ。あたまで十日の約束なれば。夜明の太鼓打つ迄は身が女房。借りた事なければ貸す理屈ない。眞二つと思へども。場所を思うて了簡する。其代りにこの上草履。おのれが面の皮削る。鑢卸ぢやこれ食へと地打付け〳〵とてもの事に節々の。碎けて落つるをこたへてをれと。蹴たり蹈んだり叩いたり。兼ての遺恨を一時に爰で晴する無得心。あるにあられぬ吾妻が思ひ。なうコレそれは餘りと。縋りつくを引抛へ。詞與五郎めが鼻の先でも抱いて寢るのがせめての腹いせ。振詰められた其代り。見せて置いての存分と。地引抱へ寢所へコレなう誰ぞ人はないか。コレ與五郎樣構ふまいぞ。濡髮樣長五郎樣と呼べど騷が柳となり猶も紛れるフシ時太鼓。地夜番の役のどん〳〵〳〵。明の六つもどんくさい。無體をするか無理するかと。嚙めど抓れど女業。與五郎も堪へかね飛びかゝらんとする所へ。濡髮の長五郎夜叉の如く駈來り。引放して鄕左衞門が。首筋掴んでぐつと差上げ。踊拍子にづでんどう。起きるを透さず髮髮。掴んで引寄せ。詞コリヤ侍。最前此方の若旦那が。八里。の道の草臥で。寢てゐられたを立蹴に蹴やり。よう打擲ひろいだな。限からは明日の日柄と。譯をいへども聞入れず。夜の内は十日の内と。無理をぬかせど刀だけ。宿の難儀とこたへてゐた。今打つた明六つが耳へ入らぬか。太鼓打つと此方の買分。おのれが無理を理にしておいたは。存分仕返しささ

う爲。六つの太鼓を打つたに寢所に何してをる。あのこゝな大ずりめ。不義者めと。地捻付け〳〵壘に摺付け。詞コレ與五郎樣。怖い事も何にもない。踏まれた程存分に。踏返して腹癒た〳〵。地おつと駈寄り與五郎が。細い足でも恨の胴骨。詞おづ〳〵せずと踏んだ〳〵。よう最前上草履で、男の面を打つたなア。今打返す受取れと。地日鼻を掛けて丁々々。踏んだは斯うか蹴たは斯うかと。踏んづ蹴つつの腹いせに。吾妻は嬉しさぞく〳〵踊り。私もこれ迄弄りをつた。覺えてゐるかと煙管の燒鐵。ぴつしやり當てられ身はちり〳〵。フシ踏まるゝよりも辛かりし。詞モウよどんす〳〵。退いた〳〵。これから又。この長五郎が。お相伴に小鯛の燒物。頤かけて歪めてくれうと。地引起して面引上げ。草履片手に振上ぐる。見付けて飛出る放駒。打つ腕先をしつかと取り。詞コリヤ何とする長五郎。ハテ知れた事侍の横面。はり歪るが何とぞしたか。イヤさうはなるまい。ナゼ。與五郎殿は打たれた代り。打返さるゝは了簡もなるが。わが相伴の草履の燒物。箸かけさする事マアならぬ。ハ、、、。われが來てゐる事聞いてゐた故。もう出るか〳〵と。待つてゐたれど。餘り遲さに呼出しの草履。此燒物は汝に振舞をかい。へ、、、。其燒物より。此かたしの作身。薄身なれども相伴さそかい。ホウ大阪でも隱れのない。濡髮と放駒。念の入つた料理の出合。辭儀なしに坐ろかいと。地立身をぢつとフシ居合腰。地傍にハアハア與五郎吾妻。侍は腰刀。反打ちかけて詞コリヤ放駒。後には鄕左衞門。鍔元寬げひかへゐる。百萬の加勢と思ひ。氣遣なしに踏込め〳〵。ア、邪魔な事いふわろぢやわい。濡髮これで出入はならぬわいやい。長吉が出入に。侍を後楯にしたといはれては。仲間の者へ顏が立たぬ。今夜の出入を延ばそかい。ホウおれも此方の若旦那が。等持つてびこしやこしらるるが。目に掛かつてどうやら惡い。いつそ明日の晩の事にせう。何處がよからう。ハテ。お定りの新町橋か四つ橋。其時にこの上草履を眞向と。地互に振上げ。ハハ、、詞是で虫が安まつたと。地二人の荒者につこりほやり。苦い顏する鄕左衞門吾妻奪られて佛頂顏。詞あたどん臭い。今夜程夜の短い事はない。馬鹿な面ども見るもむやくし。長吉來やれと引連れる。地弱みを食はぬ放駒たるみを見せぬ長五郎。門口まで伴ひ出で。詞明日の晩に。四つ橋で逢ひませう。ハテどうで通る道。遲か待つて居ませう。必ず。ヲ、必ずと。地見合す顏は蝶々の花はコハリ茨か鬼薊。引別れてぞ立歸る。地與五郎吾妻は濡髮を

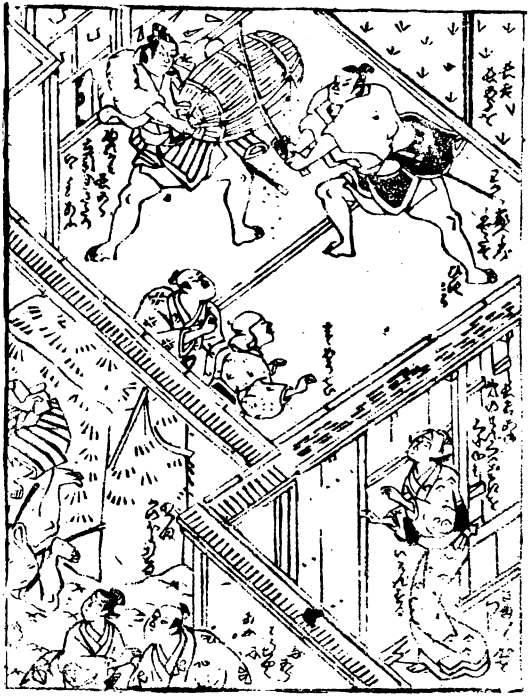
煽ぎ立て〳〵。詞其方の陰で仕返して。胸がさつぱり夜が明けた。ヤア明けた序に敲前の。六つの太鼓は七つになるまい。あれ〳〵又六つの太鼓を打つて來る。時知らぬ夜番の寢惚。地弄つて遊ぼと駈寄れば。私ちや私ちやと頰被り。取るを透して都さんか。詞こりやどうちや。最前與兵衛様の身の難儀。救うて貰うた其代り。六つの太鼓を早う打ち。仕返しさせよと主のいひつけ。先刻に打つたも私ちやわいな。出來た〳〵。道理で氣疎う早いと思うた。そしてお前はどうするのぢや。地ハテ身請は濟んだれど跡の程が氣遣ひな。時打違へた誤りで。此夜番は駈落駈落。詞出來た智惠者め主めは何處に。辻の番部屋に隠して置いた。ホ、、、跡は長五郎呑込んだ。頼むぞ。地往けと女郎の。袖無し羽織頬被。夜番出立を幸ひに。跡をも見ずして三軒へ行く雲の

第四　大寶寺町の達引に兄弟のちなみ

中ギン大阪に爰も名高き。島の内。地大寶寺町に年を經て角を絶さぬ搗米屋。一人息子の長吉は父親なしの我儘育ち。姉のおせきはあたふたと店の帳面繰返し。駄賣小賣の石高を。おく算盤の手品迄ッシ男まさりと見えにける。地春雨の向ふしぶきに傘傾け。我が家へ戻る放駒。門口に立ちはだかり。詞この又雨の降るのに俄物をなぜ入れぬ。地のらどもであるわいと。片手に提げ放り込み〳〵。傘下げて内に入り。詞コレ姉者人。此まあ男共は何處へ往きました。サイノ見てたも。一人は頭痛で枕が上らぬ。勘兵衛は心齋橋の鈔屋へ飯米持つて。ムウそれならばてつきり。座摩か稲荷の稽古場へ道入つてゐをろ。いけもせぬ弊で淨瑠璃を語ろよと。碓唄の稽古でもしをらいでと。地いひつゝ上れはコレ長吉。詞内人の者のをる前ではいはぬが。人の七難より我が十難と其方も些と嗜みや。内の手廻し諸事萬事この姉に打任せ。明けても暮れても外を家。ア、又姉者人のぶつ〳〵と。世迷言聞飽いた。おれも昨夕は藏屋敷の侍衆に。逢はねばならぬ用もあり。其上に友達共が。出入の尻持つてくれと頼んだ故。夜をふかしつい泊つて戻つたがそれが何としました。アレまだいの。意見がましい事いふとついその様に腹たちやる。もう今日ぎりで何にもいはぬ。定めて飯もまだであろ。地どれ茶を沸かしておませうと。我が子のやうに弟をッシ思ふは姉の習ひなり。地これも同じ夜歩行仲間野手の三下駄の市。悪鬼共が蛇の目傘町一杯に肩肘を。厳つがましく表より。詞長吉内にか誰ぢや。地イヤおれぢやと

打連れて。すつと這入れば。詞ヲ、二人共悪い日和によう來たな。コリヤ下駄よ。此方の内に雨は降らぬ其傘を窄めぬかい。ほんにさうぢや。したが火が降らいで仕合ぢや。エ、どういや斯ういふどえらい頤。サア〳〵遠慮せずと上れ〳〵。地ヲ、上らうと泥脚を。からげの裾で押拭ひおいへ一杯伸上れば。地悪者連は猶以て詞優しく姉のおせき。詞ヲ、皆ようごさんした。煙草でも參りませ。長吉も空腹かろ。友達衆に斷いうて喰てしまやと。地親の讓りの椀折敷。明けて見ねども弟を思ふ。手づからの。ギン煮焚物盛り並べ。地皆も些と上らぬかと膳直すれば。詞ほんにわいらも食はぬかやい。イヤ〳〵世話やきやんな。下駄もおれも砂場へ寄つてナア市よ。ヲ、二八を蹴倒した。こりや膳廻りきつう奢るな。平は大根と油揚。燒物は小鯛の難波煮。こりや甘かろ。イヤもうおれも昨夕の酒で肴は食へぬ。水輪といふ腹鹽梅。そんならおれに食はさぬか。ヲ、坐つた物でも大事なくば。是を肴に一つ飲め。姉者人むつかしながら燗して遣つて下はんせ。地ヲ、易いこと〳〵。其方の食後におまさうと。爰に燗をして置いた。詞それは幸ひサア二人ながら飲め〳〵。そりや忝い。われもちと飲まんか。イヤ〳〵おれに構はずと。この汁椀で下駄から始めい。地そんなら姉様たんますと道樂共が酒追從。こりや上燗ぢやと。フシ引請け〳〵。差いつ差されつもくが廻つて フシ大肌脱ぎ。詞コリヤ〳〵下駄よ。酒がしゆんだに肴せぬかい。ぢやてゝ謡は知らず淨瑠璃は本が讀めず。地ア、よい肴思ひ出したと近所も思はず聲張揚げ。フシ哀れなるかな石堂丸は。ヨイ〳〵。父を尋ねて高野へ登る。よい〳〵よいやなありや。ナホス詞こりやゝヤイ二人ながらはめを放すな。おれは構はねど爰は町家。アレ姉者人も近所の手前を思うて氣の毒がつてぢや。通筋をぞめくやうに徒口を止めてくれ。エ、われも餘つ程膳より下に。分別のみばえが出來たやら堅い事いふな。ヤア膳の序にコリヤ野手よ。われが膳はいかう黒いなア。その垢取るなよきつう力が落ちるげな。おれは此中取つたので。昨夕新町橋の出入面なとかぶりかいてこまそと掛つたれど。何食うてうせたやら向うの奴が其强さ。既の事しめらるゝのであつたが。長吉が來てくれたで。先の奴めがア、手ひどい目に逢ひをつた。ヲ、それればかりぢやない西口の出入も。この長吉が居合はさずば皆どづかれて戻るぢやあろ。それは格別。われ等も知つてゐる山崎與五郎と。吾妻の事について侍に頼まれ。晩には濡髪とぐつと達引せにや

ならぬ。端喧嘩と違うて。相手が長五郎なれば生きるか死ぬるか二つ一つと。地喧嘩話も聞きづらく姉のおせきは身拵へ。びらり帽子も色氣なき。丸紋の抱帶引緊め〳〵コレ長吉。詞おれも今夜は同行衆へ志の逮夜に參る。飯も酒も此處にある。喰ふたり進ぜたりしや。あの人も一人なれば。皆も緩んで留守して下さんせ。アイ野手とおれとが留守をすりや慥な〳〵。そりや忝いそんなら頼みますぞえ。地嬉しや雨も上つたさうな。近所の德は引ずりで軒傳ひッシ皆樣これにと出て行く。詞コリヤ下駄よ。是からは長吉に留守事ぼつて。も一つ飲もちやあるまいか。よかろ〳〵。ヲヽ望ならば酒は振舞はうが。二人ながらひよんな事があるわい。今もいふ通り今夜は四つ橋へ。濡髮と出入しに行く契約なれども。姉貴が留守なれば行かれぬ。エヽ甘い事いふな。出入して生きようも死なうも知れぬのに内の事思ふかい。イヤ〳〵さうでない。長吉が身はどうなつても構はねど。姉貴に留守を預つたりや表が濟まぬ。定めて濡髮が待つてゐよ。二人ながら長五郎に往て逢うてくれ。叶はぬ用で出入の場所へ往かれぬ。大儀ながらおれが内へ來てくれというてくれ。そんなら往てや



ろ。濡髪が來たらば長吉ひけを取るなよ。晩に逢はうサア野手往け〳〵。コリヤ待てわい等往たとも外の細事必ずいふなよ。地ヲ、合點ぢやと肩打振り フシ四つ橋さして急ぎ行く。地折から來るは郷左衛門有右衛門を同道にて。血眼になり駈來り。詞長吉は宿にゐるか。是は〳〵お珍しい。イヤサ珍しい所でないと。地遠慮もなく兩人はつか〳〵とおいへに上り。詞扨長吉。無念な事をしたわい。其方にも兼々頼んだ吾妻が事。知る通り身請の直段も相濟み。金子百兩手附に渡し跡金渡す段になつて吾妻が駈落。何と肝が潰れるか。察する所駈落さしたは與五郎。身が請出す事隠れなければ。女房盗まれたも同然。此郷左衛門武士が立たぬ。なう有右殿ヲ、さうでござる。なに長吉。其方も常々頼まれてゐる吾妻が身分。油斷なく詮議をしてくりやれ。ア、氣遣ひなされますな。埋んだ奴も大方に知れてござります。幸ひ呼びに遣つたれば詮議し拔いて上げませう。そりや過分。廓も大勢手分して。詮議さすと聞きたれど其儘に捨て置かれず。地身も有右殿同道にて。高津生玉鹽町邊の貸座敷を捜して見よ。吉左右あらば身が屋敷へ。知らしおくりやれ頼む〳〵と立出づれば。これは早々

又重ねてと挨拶すれど郷左衛門。むしやくしや腹で耳へも入らず打連へ立つて歸りけり。地長吉は後見送り。エエ此勘兵衛の大のらめ何をしてけつかるぞ。姉貴の戻るも夜に入らうと。雜穀の船をぐわつたひし琉球の日覆も。破れかぶれの逆引せんと。知らせによつて濡髪の長五郎。さすが難波の關取と一目に見ゆる角前髪。脇差ぼつ込みしと〳〵と門口より。詞放駒内にか。ヲ、濡髪か待兼ねた。下駄や野手にいうて遣つたを聞いたであろ。ヲ、來いというておこしたによつて。それで來たかヤア面白い。差向ひの逆引に人が來れば邪魔になると。地すんど立つて庭に下り表の店戸ふさし固め。地立歸つてサア長五郎。詞廓で詞番うた今日の出入。われから仕掛けるか。おれから手を出さうか何と〳〵。ハテさわ〳〵と喧しい。かうして來るからは死ぬるか生きるか何方ぞに。形をつけねば置かぬに急くなやい。ヤアをさめ過ぎな。今屋敷の侍衆が見えて吾妻が駈落の樣子を聞いた。定めてわれが埋んだぢやあろ。マア其埋んだ所を聞かうわい。そりや此濡髪が匿ふまいものでもないが。わりや又おれにどうしていはすりや。地ヲ、放駒がかうしていはすと。締めに行く腕外搦にしつかと取り。詞ノリフ、ウ、、、こんな事では聞かれまいと。取つたる腕首折分けて肘落し、

直に前側掴む手を叩き退け。それではいかぬ。遣つて見せうと　地　兩方一度に諸肌脱ぎ。互に手練の身顰梅。やつといふより合掌して捻れば留り。突落せばどつこいさせぬと濡髪が差しに來る腕引捕へ。　詞　ノリ長吉が高無双。打つを飛越し小腕取りこりや〳〵〳〵と引廻せば。　地　闘につまづき放駒尻餅どうどつきながら。傍なる脇差抜く間も見せず。起上り切つて掛かる俵口掴んで丁ど請け。　詞　叶ひもせぬ事すなやい。　地　して見せうと互に身構へフシ尻引絡げ。　地　開いてはつしと切掛くれば胴縄俵に切込んで。流るゝ米は雨霰。　詞　小癪するなと鉾下りに突つかゝる。どつこいさせぬと俵の楯。　地　切先にて刎飛せば飛退つて拔合せ。受けつ流しつ我流無法のフシ白双と白双。　地　白髪交りの親父共。駕籠を昇せて爰ぢや〳〵と戸を蔽けど。二人は耳にも聞入れず。命限り根限りに切結ぶ双音鍔音ばつしばし。表よりはぐわた〳〵〳〵。　詞　長吉の大盗人と　地　戸を打敲きフシ聲々にわめくにぞ。　詞　長吉待て。待てとは濡髪おくれたか。イヤ。おくれぬ。今あれ表を蔽いて。われを盗人といふが耳へは入らぬか。そんならばわれとの達引些との間待つてくれるか。サアおれも盗人を相手には得せまいわい。ヲ、尤もサア引け。　地　汝から引けと一度に拔身をさつと引き。鞘に納めて濡髪もおいへにどつかとフシ押直れば。　地　表の戸をぐわらりと明け。　詞　此長吉を盗人と今いうたはおのれ等か。ヲ、おいらぢや。大それた事なればつい立ちながらいはれぬ。皆此方へ遣入らしやれと。　地　駕籠諸共どや〳〵と内に入る。中にも人物らしき親父先へ出で。　詞　扨米屋の長吉とはわどりよぢやの。エヘわり様は前髪だてらゑずい事ようするの。此方の男を昨夕立賣堀迄使に遣つたれば。新町橋でよう投げたり踏んだり仕やつたの。それで此方の内は人參の氣附のと醫者押着。コレ駕籠衆。たゝかれた者其所へ出して往んで下され。コリヤ久

兵衛痛くと堪へて突へ出よ。何の意趣で此様には仕やつたぞサアそれ聞かう。ヲヲどいつぢや知らぬが。剣術を過すによつて叩いたが何とした。それにおのらは此長吉を盗人とは何でぬかした。ヤアけい〳〵しさうに物いふまい。昨夕此男に銀六十匁。日野の打逢へ入れて持たしてやつたに。擲かれた時から其銀がないといひますわいの。フウ其銀が見えねば此長吉が盗んだのか。マアそんなものかい。大だはけの奢どもが、様々の事ぬかしてうせる。おれが又盗まぬ時は汝等生けては返さぬぞよ。ホ、ウそりや如何なりとこな様の心次第。その又盗まぬといふ證跡があるか見ましよわいの。ヲ、六兵衛殿さうぢや〳〵。地柔かういはずとも。いつそ町へ断らしやれと ハズミ 近所へ響くフシわゝり聲。地姉のおせきはいつきせき戻ればいつものつけ答へ。様子を猶豫ふ其中に。又東から二三人若い男を肩に掛け。詞コレ〳〵五人組衆。マア長吉に逢うて一せつばさつしやれ。地さうぢや〳〵と戸を開き。詞長吉殿とは此方でやすか。是はおれが息子。昨夕山本町へ謡講に往た戻り西口で。掛構もせぬ者に喧嘩仕掛けてづなう胴突きやつたの。そればかりか羅紗の紙入に。金三歩と豆板が二十匁餘り。こな様は〳〵よう味いことしやつたの。疵養生代と紙入の金共に。今戻しやつたら了簡せうサアどうぢや〳〵。成程うぬ等がぬかす通り。西口の頼母が門で出入した。おれにちつくと栖突いたによつて胴突いてこましたが。金落したは彼奴がたはけ。放駒が内へ來てずか〳〵物を吐したら。何奴も此奴も手足を挽くぞ。アアゆすつたといふ事をいふまいか。總別わごりよ達が喧嘩仕掛けて物取るをはつたりと言うて今はやるげな。フウそんなら奴等は此長吉を盗人と吐かすのか。堪忍ならぬと脇差押取り立上る。おせきは驚き門口より走入り。長吉にしがみつきコレ〳〵姉ぢや私に任して待つてたも。詞コレこな様方は何處のお人か知らぬが。見ればこ年の寄つたお衆。ちつと物が麁相にござんす。麁相とは何が麁相。さればいな。長吉に限らず力達をする者は。喧嘩口論を好き好んで。科もない人を擲いたり踏んだりするは若い者の習ひ。殊に喧嘩は降物。男は閾を踏出すと七人の敵があるといへば。短氣な弟を持つた身は。ほんに〳〵夜一夜碌に寢た事もないぞいな。長吉が喧嘩して打つた擲いたといふのならば。七重の膝を八重に折つても詫言はしませうが。金取つたとは人の賤たる惡名。此詫言は私や得せまい。ほんに可哀さうに悪黨には生れたれど。人の物を箸一本取つて戻つた事はない。

もう此上は弟が了簡してもこのせきが了簡せぬ。サア盗んだといふ證據見よ。地證據もなうていはしやるは何と麁相ちやあるまいかと腹立つ。スエテ儘の震ひ聲。詞エエ姉者人こな様に構はす事ぢやない。イヤ私に言はしや。其所にゐさしやる前髪殿も。定めて喧嘩の相手ぢやあろ。ヲ、おれも出入に來たれども盗人を相手にやせぬ。其方の達引から仕舞はんせ〳〵。コレ〳〵姉御よう聞かしやませ。喧嘩の場から金が見えぬによつて。盗みやつたといふが無理か麁相か。但し盗まぬといふ證據があるか。地ヲ、其證據は姉が見せましよ。弟の一裝束入つてあるは此箪笥。抽斗を打ちやけて捜さすのが面晴と。明けに立つをコレ待つた。詞これを見せれば家捜同然。サア其家捜さしておいて跡で存分いはにや置かぬ。地姉に任しやと抽斗の。上一重は袴入次は帷子薄羽織。着物布子もでんぐり返し箱の底より引出すは。遂に見付けぬ紙入打違。それ〳〵それが取られた羅紗の紙入裏は京繻子。其打違は此方のぢや定めて銀は飛んだぢやあろ。何とそれでも詐ふかと口々に喚けば長吉も。はつと吐胸を突き詰めた。姉のおせきは顔をも上げず面目。ウシ涙に暮れければ。詞コレ姉者人。おれが入物に何があらうが彼があらうが。俺や盗んだ覺えはない。まだ抜け〳〵とそんな事よういふなと。地髪搦んで捻付け引付け涙をはら〳〵と流し。詞此打違や紙入に手足があつて。我が身の入物へ這入つたか。我が身が知らいで誰が知らう。ほんに皆の手前も恥しい。是迄も文字半錢違へた事のない者が。其氣になるは神佛の罰か咎めか。何がまあ乏しうて囚果な心になつたぞい。死なしやつた父様や。此姉が顔まで汚すやうな事よう仕出したと。地打違取つて用捨なく。擲き据ゑ打ちすゑたる姉の親身の强意見。詞イヤサどの様にいはしやつても盗した覺えはない。地知らぬ〳〵覺えがないと詞つことに言放す。詞コレ〳〵其方の意見聞きにや來ぬ。地埒が明かずば明ける所で明けて見しよと。ばら〳〵と立上がればア、待つて下さんせ。詞其銀私がわきためましよ。暫しが中あの納戸へ。ムウ其様にいはしやる事なら。出所へ出るがみめでもないア、そりや忝い〳〵。地サア〳〵此方へと姉諸共ヲシ打連れ一間へ入りにける。地長五郎は膝打敲き。詞コリヤ長吉。わりやまあ味な事するなあ。ありやマアぢやうかい。さいやい。身に覺えぬ事なれど。地われが手前も面目ないと。脇差に手を掛くれば。詞コリヤ何する。此脇差捻くるのはわりや死ぬるのか。ヤモウあれ程に思うてくれらる。姉貴の心がどうも濟まぬ。

われが盗みせぬ事は此長五郎がよう知つてゐる。殊にわれは日頃爰のすんどよい者ぢや。によつて今日おれが達引に來たも相手がよさに來た。したがわりや幸福者ぢや。フウ何と。幸福者ぢやとは。此長吉をきよくるのか。さればやい。おれも在所に母者人を一人持つてゐれど。五つの時別れてから逢うたのは只一度。養子に來た先の父親も死なるゝ。ほんの木から落ちた猿同然で。誰が一人意見してくれてがない。われは結構な姉を持ち。よい意見の仕手があつて。それで幸福者ぢやといふのぢや。總別喧嘩する者は。ばつたりして金も取るやうに思はるゝはアア無念な事ぢや。おれも今のを聞いては此後ふつつりと喧嘩を止める。われも心を入れ直せ。殊にあの野手や下駄めは。惡い奴等ぢや重ねてからは附合ふなと。地打つてかへたる詞も聞かず。詞イヤもうさういうてくれるは過分なれど。どう思うて見ても姉者人の顏が立たぬと。地又脇差に手を掛くる。コリヤ待て長吉。イヤ〳〵放せと競合ふ中へ。姉のおせきは走出で。詞ヲヽよう留めて下さんした。コレ長吉姉が何時もいうた事今思ひ知りやつたか。此後心を直すなら。我が身の顏はこのせきが立てゝやろ。ハテおれが顏さへ立つ事なら。しかとさうぢやぞや。サア〳〵同行衆皆來て下さんせ。地爰へ〳〵と呼ぶ聲に。强請に來た親父ども肩衣懸けて珠數爪ぐり。どや〳〵と立出づる放駒も濡髪も。ヤア〳〵こりやどうぢやとフシ呆れ顏。詞ヲヽ合點が行くまい是は此方の同行衆。常々わがみの喧嘩好が苦になりますというたれば。何卒心を入れ直してやりたいと。今夜の逮夜に講中が。打寄つて談合の所へ私が行き。先刻に聞いた喧嘩の話をいうたれば。同行衆が此樣に先の相手になつて。强請込ましやつたもわがみを眞人間にしようといふ皆のお世話。そんならあの打違や紙入を入れて置いたは。ヲヽおれぢや。必ず惡う聞きやんなや。人に惡う思はれぬも親の蔭。父御は丸屋仁左衛門とて。此町では口利の結構者後生願ひであつたのに。其人の子にわがみのやうな者がようも〳〵生れた事ぢや。父樣の死にした迄苦にさしやつた其方の事。私を枕元へ呼んで。おれが死んだらあの惡者が身の行末。思ひやられて迷ひの種。姉よおれに成代つて意見してくれよと。死病は苦にもせず。其方が事ばつかりを言死にさしやつた。地末期の一句が此耳に殘つて私や得忘れぬ。それ故に此姉が一生身を持固め。わがみの心を直したら冥途にござる父樣の。とひ弔ひに勝らうと思うて心を碎くわいの。地殊に今日は父樣の年忌

ぢやに。出入とやら喧嘩とやら。殺すの切るのといふのをば。草葉の蔭から父様が。見てござつたら悲しかろとわしや泣いてばかりゐた。詞それで此年忌にも。歴々の子はありながら内で弔ひ得せずに同行衆でして貰うた。もし今日の日を忘れたかと。先刻にも肴据ゑたればどう思うてやら食はなんだは。まだ人間らしい所がある。先刻にも友達衆の徒口を聞けば。年端も行かぬ石堂丸。地父を尋ねて遁々と。高野の山へ登つたといなう。地それ程こそはあらずとも。親の年忌の逮夜に。お眞向様へは手も合はさず。色里へ入り込み人を投げたり踏んだりして。それがマア父様のとひ弔ひにならうかと。心に思ふありたけを數へ立て〳〵。弟を思ふ眞實に。袖も袂もフシギン千石通涙の種を締ひけり。詞ヲ、姉御尤もぢや〳〵。長吉殿よう聞かしやれ。此方の心直さう爲に同行共がよい年して。拵事して來たも佛様の方便と同じ事。此方の心さへ直れば。それがとひ弔ひとなつて仁左殿も佛に成らるゝ合點がいたか。サア合點がいたらば今爰で。誓言立てて聞かさしやれ。イヤもう皆其様に世話やいて下んすを。おれも悪うは聞きませぬ。これからはふつつりと出もしよまいし。商を精出して姉者人の詞を背きますまい。ヲ、出來た〳〵。コレおせき様悦ばしやれ。地ア、嬉しうござります。これといふも同行衆のお世話故。長五郎様も爰にゐさしやるこそ幸ひ。此後弟が身の上は萬事お前を頼みますと。口のこはい放駒同じ仲間の蹈馬に頼むはフシ姉の利發なり。詞いやもうそれは互々頼まれたり頼んだり。兄弟同然にナア長吉。懇にしようわいな。ハテわがみさへ其氣ならおれもさうせう。ヲ、そりやよい事ぢや〳〵。そんなら姉御もう往にます。コレ長吉殿。これからは同行の顔も見知るやうに。些お寄にも參らしやれ。アツア鬼角何事も御開山のお蔭なんまみだ〳〵〳〵。地サア〳〵皆の衆いさござれとフシ打連れ立つて歸りけり。地息繼ぎ敢へず下駄の市門口から聲高に。詞コリヤ長吉かの屋敷の侍衆が。與五郎と吾妻とに。雛波裏でつくはしやつさもつさの最中。野手を殘して知らしに來た早う往てやれ。地おれも是から戀の出入の仕舞を見よと。又引返し走り行く。濡髪聞くよりつつ立上り。詞與五郎殿と吾妻とが侍にでつくはしたか。南無三寶長吉さらばと駈行くを。詞マア待て長五郎。なぜ留める。ヲ、サおれも姉者人の意見でもう侍の肩は持たぬ。今兄弟の約束して。一人遣つては心許ない。コレ〳〵〳〵長吉待ちや。たつた今わがみは誓言立てて又往くのか。地そり

やならぬと引放し。長五郎を突出し往てごさんせと戸をひつしやり。ヲヽ合點ぢやと逸散に難波。裏へと三歩へ駈り行く

第五　芝居裏の喧嘩に難波のどろ〳〵

地大賣寺町を横切に直には行かぬ郷左衛門。業を煮して與五郎が髻片手に引きずり廻す閻中。難儀難波や芝居裏。歎く吾妻を有右衛門小脇にかい込み。詞郷左殿手ぬるい〳〵。ヲヽサ合點。コリヤ吾妻。此泥坊めになに心中立。手附金は百兩渡す。追付け跡金も埒明けば身が奥様。それを連れて走らうや。ヤこな生ずりめ大盗人めと。地兩人寄つて蹴据え蹴飛し踏みのめせば。與五郎は半死半生ヤレ吾妻。詞與五郎が身はどうならうとも。必ず短氣持つまいぞ。地エヽ思へば無念とよろぼひ立ち。しがみつくを踏飛ばし。大地に打付け勦かさねば。吾妻はわつと泣き沈み。胴慾や酷らしや。私も一所に殺してと縋り歎くを。突退け〳〵兩人が。與五郎一人を手玉につき。ふんづ蹴つつの打擲に。目も當てられぬ吾妻が思ひ。戎橋筋一文字飛ぶが如くに長五郎。駈り來るより侍二人が腰骨摑んでぐつと差上げ。大地へどうど首の骨。碎けて退けともんどり打たせ二人を圍うてフシ仁王立。詞サア長五郎が來た若且那。氣遣のきの字もない。吾妻様を手に入れねば第一に私が立たぬ。コレ吾妻様怖いことない。介抱々々とフシ稲村蔭に忍ばせ置き。詞サアお侍達濡髪がいふ事あつて來た。どう性根付けてお聞きやれと。地喚けど更に返答なく。砂塗になつて起上り。互に自脈顔見合せ。詞何と有右氣がついたか。成程少し付いたは付いたが。皆目に首が廻らぬ。イヤ身共も御同然。今のは何奴。イヤ私ぢやおれでごんすと。地暗がりにすつくと立ちし長五郎。そりやこそしれもの油斷すな。ヲヽサ合點と刀を杖。口は達者に喚けども。反打つ所は首の骨フシ歪み筋張り立つたりける。詞イヤ其様な仰山な事ぢやない。マア下にゐて下さんせ。サア〳〵〳〵。一寸々々とせり立てられ。詞默れ長五郎せはしない。何ぢや。われがやうに痛みのない體とは違ふぞ。假令難波道骨接へ行く道が近ければこそ。シヤほんに痛みをかしい。有右はどうぢや。骨が折れた。卑怯な長五郎諸待を騙投げ。焚喰や辨慶でも騙しや負ける。なぜ名乘らぬ。名乘りかけて來るならば。ヲヽ此郷左衛門日頃習ひ覚いたる劍術秘術。猿の木登り山雀の餌落し。エヽ喧しい其様な事聞きにや來ぬ。濡髪がいふ事擽摘んで申す。吾妻殿の身請の高は六百兩。與五郎殿から親方へ渡した。手附金は半

金の三百兩私が手から渡した 則ち受取が爰にあると押披き。詞目附の所ナ。見えたか。よどんすか。跡金が一兩かけても吾妻殿渡さぬは廓の習ひ。それを連れて退いた與五郎殿。此方も悪いぢや。けれどもお前方が渡しもせぬ六百兩を渡したによつて。吾妻は國へ連れて去ぬ。イヤ女房ぢや奥様ぢや何ぞと戯らしう云はしやる故。若い人なりふつとした出來心。併し此方には三百兩手附渡して置く。今でも跡金の三百兩さへ調へばそつこで請出す三百兩。都合六百兩でさらりと埒が明く。お前方は僅か手附百兩。跡金の五百兩お國元から來るか知らぬが。惣體屋敷方には格式があつて。縱へ金があり餘つても。太夫請出す何ぞと其様なばつとした事は屋敷方ではならぬものぢや。此方は高が町人。山崎では一というて二のない與五郎殿。それでさへ金事といふものが。共様に五器皿洗ふ様に心安うはないものぢや。畢竟お前方は。今度の身請を邪魔して。吾妻殿を遣りともないが精一杯。意地の悪いといふものぢや。其意地づく私が貰ひます。申し郷左衛門様。申し有右衛門様。 お執成し一入頼み奉ると。フシ親方思ひぞ道理なる。 始終を聞いて郷左衛門有右衛門にめくばせし。詞ム、成程尤も。屋敷の格式ある故。跡金五百兩調ふまいとな。さうぢやイヤ尤も。向後吾妻が事ふつつと思ひ切つたぞ。エイ然らば思ひ切つて與五郎殿へ事故なう。ヲ、サ二言はない思ひ切る。ヲ、切ると 拔打に有右衛門切付くる。腕首取つてはね倒す。間もあらさず突掛くる。郷左衛門が肋を丁ど脚にて蹴上げ。詞こりや何するのぢや。ほでてんがうひろぐと。汝等がどすの貧乏神。相手にやなり兼ねぬぞといふは嘘。何卒了簡付けて下んせ。そりやもうお前方二人してなら。此長五郎を仕舞ひ付けさんすぢやあろけれども。又私も手もあり足もあり。えいやつとうの道も。へ、些とばかり知らぬでもなし。すりや互に身上づく。ナ。大事の事ぢや何卒了簡。ナ了簡。イヤ了簡ならぬ。もう破れかぶれぢや。可愛い吾妻は手に入らず。跡金は才覺ならず。 せめておのれと拜打。さしつたりと沈んで受留め。詞スリヤどうでも了簡なりませぬか。了簡ならぬ。疑とさうか。導い〳〵。 ならずば斯うぢやと腕絡の臂落し。居ながら投ぐる二人が刀。飛鳥の如く躍り越え。突けば開き。投ぐれば沈み。拔けつ潜つつ眞暗がりに閃く稲妻。是非に及ばぬ濡髪が段平物の拔打ちに。有右衛門が眞向疵道雖波道。畑の畦道踏みくじきうねり〳〵て切結ぶ。 跡に吾妻がおういく〳〵と與五郎諸共。うろ〳〵目玉に

下駄の市。野手の三とが遲ればせ。與五郎吾妻をほうど抱へ。サアしてやつた。詞郷左衛門殿に手渡しせう。ヲ、サ褒美してやらんと ッシ駈行く向うへ長吉ぬつと立塞がり。詞野手か。市か。ヲ、兄かえい所へよう來たぞ。ヲ、地よう來たと兩人が首筋摑んで眞逆樣。腰骨ぽん〳〵踏みのめせば。コリヤ赦せ。兄が怒つた〳〵と。機嫌取顏おくれた顏。長吉は只濡髮が身の上如何と尋ねる中。透を窺ひ與五郎吾妻。宙に引立て飛んで行く。ヤア芋虫めら味をやる。それ奪はして置かうかと。ッシ跡を慕うて追掛くる。地長五郎は郷左衛門に渡合ひ。有右衛門が片足片手に引擦り廻す畑中。苛つて切込む郷左衛門が。急所を蹴られたじ〳〵。又切付くる向見ず。性懲もなき死損と。すつぱと池の泥塗れ コハリ笑にあり〳〵有右衛門。狼狽眼の同士討や。地芝居に並ぶ茶屋二階かゝる難儀の時知らぬ。餘所は騒ぎの一踊り。胸踊らして長吉は。二人を奪ひ立歸れば。呻く聲々のた打つ音。詞長五郎か。さういふは長吉か。ヲ、扨は二人の侍を切つたか。ヲ、サ今ばらしてもう止を刺すばかり。わりや又其所にどうしてゐりや。與五郎殿を捕へて。ヤアそれは。コリヤ〳〵濡髮狼狽へな急くことはない。此長吉とわれとはな。今日大分約束した事がある。ナア合點か。斯うさすまいと思うて。姉の手前を拔けて來た。コレ侍衆。長五郎と長吉は。今日大分達引をして置いて。さつぱりと譯が立つてあれば。おりや吾妻を連れて去ぬ。おくれずと切つた〳〵〳〵と。地長五郎に力をつける ッシ詞の謎。地其間に二人の侍を。刺り〳〵て止の刀。押拭ひ〳〵。詞長吉々々二人ながらとつくりと仕舞うたが。二人の衆に怪我はないか。イヤ怪我はないが長五郎。わりや大阪にゐられまい。ハテ斯うするからは此濡髮。心はとつくりと落付いて。イヤ居られまい。追取つて與五郎殿の身に難儀が掛かる。コレ與五郎樣怖いことはない二人ながら顚はんすな。ナウ長五郎それぢやによつて。此衆は汝に成り代つておれが慥に預つた。麁末にやせぬ。マア一年と半年は。陰したらよからうとおれは思ふ。落着き所はどれ耳寄せ。ナ。ム、。えいか。サア往け。エ、忝い長吉。與五郎樣吾妻樣隨分御無事で。長五郎もう往きやるか。濡髮樣さらばえ。長吉いよ〳〵。さらば〳〵の後より。何時の間にかは下駄の市。野手の三とが一時に。こりや聞いた。詞長五郎やらぬと取付けば。さそくの濡髮身をかはす。地ほぐれて向うへ頭轉倒骨兩人が膝に固めて ッシロに袖。詞長吉どうせう。ハテどうのかうのと顯閑いたらも

くが破りよ。ソレ毒食はば皿。ソレ一寸切られるも。二寸切られるも 地こりやかうと眞逆様に千本突。泥へ乳だけ突込めば。 詞此奴は下駄で不斷泥。 地これがよかろと長五郎。揑ねたる土へ。油搾木の槌打つ如くに忍込ましゝサアえい。 詞往くぞや往け〳〵。 地やれ急げと。胸はときつく法善寺。 詞七つぢや往け。 地足を早めて 三人へ別れ行く

第六　橋本の辻駕籠に相輿の駈落

地思ひなくて ハルフシ藪入したき。親里に。與五郎が嫁お照。去らるゝとなく去るとなく呼戻されて明暮に。辛氣〳〵のぶら〳〵病さのみ床にはつかねども。フシつれなき床も懐しき。 地お氣の縺れを慰める下女が按摩も話伽。 詞申し御寮人様。わたしや先日お隙貰うて。京の芝居見ましたがな。江戸役者の中村七三。二の替りの淺間が嶽。見て參りましたが面白い事でござります。女形は花井吾妻。奥州といふ太夫になつたよさ。それは〳〵七三が傾城買どうもいへぬ。あれなりやほんにどつちやからも。惚れる筈ちやと思はれますでござりますと。 地餘所の噂も身にあたり。 詞ムン其花井吾妻とやら。傾城になるかや。ア、見たい事ぢやなう。吾妻といふ名で太夫になれば。與五郎様の惚れてござる。藤屋の吾妻も同じ事。 地どの様にすれば殿達に思はるゝのぢや私や見たいと。いとゞくよ〳〵ひよんな事。言損ひの出直しに フシお藥上ぎよと立つて行く。 詞えい〳〵。えゝ。ヲツト杖しよかい。てもしまな物ぢや。太助。二十六七貫あろかい。ヲ、あるとも〳〵。旦那が十四五貫。女中様が十二三貫の相輿。牧方から橋本まで。五百には安いものぢやナア甚兵衛。ヲ、勘六と喜兵衛とが闘取りに當つたら。 地へたりをうと持自慢。フシ つい行過ぐる門の口。 詞おつと突ぢやぞ下して貰を。辻駕籠は狭うて腰も首もむり〳〵いふ。ヤレしんどや〳〵。 地歩行いて些と休まうと垂をひらりとコレ吾妻。 詞かう二人乘つた形は。角にいの字で四角な長十郎。見立がきついか氣疎いかと。 地駈落しても口へらぬ。面白病は一盛。 フシ橙にてや直るらん。 地太助は明駕籠振擔げ。 詞そんなら甚兵衛後から戻りや。ヲ、お約束なりや程が知れぬ。ヲ、早仕舞や。旦那これに。太儀々々。サア太夫どうせう。どうやらいふのであつたなう。それを私に何の談合。 地奥様も來てござりや。お逢ひなされてよいやうに。おつと合點。 詞甚兵衛は何處ぞに待たしておきや。我が身は此處を動きやんな。ぢやがおれはつつと入ろか。頼ませ

うといはうかと。地くしやらむしやらも闊高き舅の内を差覗き。詞むまし。貴麻は我等がお内儀様。幸ひ邊に人はなしと。つか〳〵と入つて枕元。どし〳〵〳〵と足音に。ふつと目覺めて見合す顔。詞エヱ與五郎様。ようお出でなさんした。何とは思うて來ておくれなさんした。何とは我が身に逢ひに來た。さう仰しやるは嘘なれど。地嘘にもそんなお詞は。閉初めの閉納め。詞ア、幸先の悪い事いふ人ぢや。舅殿はお留守か。イ、エ奥に御寢なつて。ム、寢てか。それで半分落着いた。マアお供には誰が來たえ。イ、ヤ誰も來ぬ連がある。お連はどなたぢやお入りと。地挨拶ながら表の方。ちらと素振を見て取る廻氣。詞與五郎様聞えませぬ。お氣に入らぬは私が科。幾日お宿にどざらいでもどうと申した事はない。父様の堅い氣から。親與次兵衛に謝らさにや。何程でも戻しやせぬと。いぬことならぬ私。悋氣でいなぬとお腹立ち。面當に吾妻殿連立つて來てこれ見よがし。私や近付になりもせう。父様は何處で立つ。地昨夕も讀んだ本の中悋氣も少しは愛想ぢやと。書いてはあれど怪我な事思ひもせにや言ひもせぬ。私ばかりか父様迄それ程お前は憎いかえ。お胴欲なと恨泣き傍で聞き居る夫より。洩聞く吾妻が切なさは。フシ身も悔むより外ぞなき。詞イヤさうぢやない有様に言を。おりや隠匿うて貰ひに來た。エ、。父御様の御機嫌が悪うてかえ。イヤ親父は知らぬけれど。内へ往なれぬ譯は。彼所にゐるあの吾妻。請出さうといふ客があつて。どうも濟まぬによつて連立つて駈落。景清は牢破り吾妻は關破り。内へはどうも連れては往なれず。誰を頼まう所もなし。頼まう人は我が身ばかり。舅へ沙汰無しにして。こそで二人を隠匿うてたもらぬか。コレどうぢやいなう。地サアそれも皆私が科。お氣に入る様に生れたら其御苦勞はさせませぬ。詞エ、そんな所ぢやない。隠匿ふなら隠匿ふとちやつというてたもいのと。地急く男には返事もなくフシ表へ出でて。吾妻が手を取り。忙しなければ染々とお近付の挨拶せぬ。フシ是へ〳〵と連れて入り。詞お前は私が身に代へて隠匿ひおほせて隠し拔く。與五郎様はお館へ早うお歸り遊ばせと。地聞くに吾妻が不思議立て。詞憎い奴ぢやとお叱りもないは。賤しい此身とお育がら。それに不審はなけれども。地與五郎様は隠匿うて私はならぬとありそな事。あちらこちらの仰しやり様。仇を情でお返しは氣の毒がらせ足らぬのか。詞いゝえいえ。つい一通りで殿御をば騙さるゝと思や腹も立と。關破りといふ事迄して。命に懸けて與五郎様を。

思うて下さる吾妻様何の憎う思はうぞ。お二人ながら隠匿へば。主に逢ひたいばつかりに傾城迄を引入れてと。一途に堅い父様のお叱りは知れてある。地見ず知らずでも頼まれて隠匿ふが人の道。これは又深い縁。詞忍ぶ身はお前ばかり與五郎様に科はない。お館へお歸りあつても難儀のかゝる筋あるまい。吾妻様さうぢやないかえと。地おぼこなやうでも武家育ち。立てぬく義理に恥入りてフシ顔を。得上げぬばかりなり。地與五郎は若氣の苦なし。詞コレお照。そんならば吾妻を頼む。おりやもう去ぬるぞや。どうでもさうせにやならぬかえ。どうやらそれでは。コレ。些とのの間ぢや大事ない。又逢ひに來るわいの。コレとつくりと預けたぞや。お氣遣ひ遊ばすなしつかりと預つて。晩から私と二人寢て。廓の話も聞きやんしよ。イヤコレ。わがみの事をおりや何にも。悪うはいやせなんだと。地可笑しい尻へ手の廻る。フシ帶引緊めて立出づる。詞聟殿待ちやれ往なれまい。連れて走れば同罪遁れず。關破りの與五郎はこの治部右衛門が隠匿はうと。地呼留むる舅の顔。はつと二人が愁かに。逃げそゝくれて手持なくフシ消えも入りたき風情なり。詞イヤサ今更に何遠慮。娘出來いた。吾妻をばよく隠匿うた。サア與五郎。其方は又身が隠匿ふ。エイ。そんなら彼方も御一所に。サア隠匿ひやうこそ曰あれと。地手に持つたる硯箱差出し。詞サア聟殿。娘照へ暇の狀。一通書いてくれめされ。エイ。いやさ驚く事はない。氣に入らぬ女房を持つて貰ふ追從に。隠匿つたとはいはれては。この橋本治部右衛門人中へ面罵が濟まぬ。他人になつて隠匿へば。治部も立つ。お身も安穩。肩の悪いは娘ばかり。なんとせう。是非々々書いておくりやれと。地退引させぬ詞詰。はつと一度に三人が心々の當惑涙。詞ヤア娘。兼て言聞かせ置くに何泣く事。地未練な奴めと叱る片手に硯箱。引寄せて墨磨りならし。詞書きやれ與五郎。但しは嫌か。縁切らずば潔白に。我が聟がかく〳〵と代官所へ訴へうや。縁切つて隠匿はるゝか。縁切らずに訴へさするか。サアどうぢや〳〵と地促立つる程とまくれて。返事なければコレ申し。詞私が事は大事ない。お身さへ無事であるならば事濟む後にはどうなりと。お心休めにマア書いてと。地いふもおろ〳〵差當る。訴人の嚇に詮方なく。遣りたい暇もやり難い義理も糸瓜も一つ書。お定りの三件半手早に書いて差出すを。中から取つてお照様。詞こりや吾妻が預ります。私が見る前で渡さしては道立たず。というてお書きなされねば隠匿ふまいと仰しやるし。お書

きなされた暇の狀。私が預りや事濟むと。
地 緣の意氣づくそれ者とて。 フシ 諸譯を立てし捌なり。 地 折もあれ山崎與治兵衛我が子か爰に來てゐるとは。しら髮天窓のおつぼう髮供をも連れず相勇の。門口に頼みませう。 詞 與次兵衛でござる。治部殿に御意得ませうといふ聲に。 地 見付けられなと三人とも。奥に追遣り出迎ひ。
詞 與治兵衛殿お入りと。 地 何氣なけれど二人共奥へ入る風見て見ぬ風。見付けられてもさあらぬ風。 フシ 互に一物ある顏なり。 詞 扨々打絶え御意得ませぬ。相變らずお達者さうで珍重々々。いやもう私が達者なより。息子殿の達者なにほうど困り果てました。照は氣色がよござるかの。イヤもう段々と心よう。物も喰ひますか。たべるとも〳〵。そんなら連れて往にましよかい。イヤ先づ今分では遣られませぬ。サアその遣られぬも大方合點。といふと事が難かしい。舅が迎ひに來るからは。ハテもう利潤といふものぢや。何かなしに戻して貰ひたい。イヤ其許がお出で故。照めは猶え戻さぬ。與五郎おこせといはしやるのか。いや與五郎が參られたらば。いよ〳〵以て往なされぬ。なぜでえす〳〵。與五郎が本心から。照を戻せといひこさば自身は愚か。丁稚小わろをおこすとも違背なく戻すが道。臭い物に蓋すると押付業氣に入らぬ。イヤサさういはんしやんないの。嫁に取るがらおれが娘。野良めが性根が直らずばお照で跡を立てる所存皆迄いやんな。我が子にまで金銀を惜み。命生害に及ぶも構はぬやうな與次兵衛。人の子で跡立てると。好い加減な事おいやんな望みにないぞ。ヲヲ望みにない與五郎。なぜ引込んでおきやる治部右。シヤいはして置けば詞が過ぎる。放埒の加擔人はせねど。傾城を請出し。妾めかけにせうとも誰か咎めぬ身上。値の金に手支させ。義理に義理の迫つた駈落。見捨てれらぬ智の難儀。引込んだと言はるゝが面倒さに。緣切つて隱匿うた。ア、それも嗅いで來た。女郎を連れて走りをつたと新町からの付答。今日も明日も明後日も醒果てたたわいなし。身上が氣遣で引込んで無理暇取り。養を取るやうな智をかへる思案ぢやの。默れ與次兵衛。太平の代に入らざる武具馬具賣代なしても。養はるゝ治部右衛門ぢやないぞ。諸色を買込み直上げさせ。高利を貪り人をひづめる。むさい汚い人非人と。この治部右衛門が性根は違ふぞ。イヤ人非人とは誰が事。わどりよの事さ。聢とさうか。諄い〳〵。諄くばかうぢやと 地 せき詰めて。氣短脇差引拔いて打掛かるを鍔にて受け。 詞 惡戯すなと刎飛ばす。
地 猶苛立の減多切り。互に聞かぬ氣拔合

せッぱつし〳〵と切り結ぶ。地中を押しわる息杖は始終殘らず立聞く甚兵衛。詞マヽ、、まあ待たしやませ〳〵。待てとはおのれ何奴ぢや。誰であらうとも留める。思案あつて留める私ぢやマ、〳〵マ、〳〵どつこいな。地二人の刀を息杖で。下にしつかと押へつけ。詞先刻からの一部始終。お二人ながら腹の立つもお子達が可愛さ。尤もぢや〳〵と尤も序に留めるも尤も。ぢやと思うて聞いて下さりませ。今の喧嘩の起りといふは。吾妻様とやらから起つた事。今でもひよつと其傾城の親が來て。今の割口說聞いたら。縱へば私等が樣な雲助でも。何とまあ悲しい術ないこつちやあらうとは思はしやりませぬか。思ひ遣つてこつとらまで涙が溢れて。留められぬからの私が思案といふは。お傾城の親に成り代り。私が段々意見して。若旦那樣の事思切らしや。浪風なしに治まるぢやござりませぬか。何卒私がお願と。地思ひも寄らぬ平賴みは。藪から片棒の駕籠の甚兵衛ッシ心ありげに見えにけり。詞ム、すりやわり樣が吾妻に意見をして。思切らせうといふのか。ム、其所もある治部右。願ひ叶へて待つ氣はないか。ハテ身共とても聟や娘。不便さから腹も立つ。了簡はしたけれど一旦武士の拔いたる刀。サア〳〵〳〵〳〵。其刀を此甚兵衛に預けさしやつて下さりませ。首尾よう元の鞘に納まるやうに。働いてお目に掛きよ。地平に〳〵と平押に。預ける氣より預けたき心くろめる黑鞘朱鞘。腰から拔いて投出し。詞サア治部右。サア與次兵衛。これで暫く言分も。吾妻が返答一つに極まる。それ迄はまあ奥で。甚兵衛とやら賴入ると。地子故に詞廻り緣オクリ親と。ヘ親とは連れて入る。地甚兵衛は刀こて〳〵と鞘に納める受合の。思案とり〴〵夫ぞとは。知らぬ吾妻は落付きし。樣子を道に待合はす放駒へ知さんと。詞甚兵衛どの〳〵。ヲ、爰にか。あの此方は此樣子。長吉殿へしらして下され。アイ〳〵畏りましたが。私も些とお前樣にお目に掛りましたかつた。幸ひのよい所と。地近う寄つて跪き。詞お豐大きうなつたの。母はもう三年になるかや。ム、此方それを如何して知つてぢや。ヲヲ女房や娘の事。縱へ隔てても知らいでかいの知つてゐる。ヤアそんなら此方は。ヲ、お吉が連合其方の親。エイ扨はお前は父樣かと。地いへど不思議は晴れぬ顏。詞ヲ、合點の行く樣にいうて聞かさう。この甚兵衛は大阪の楽樂町に。破家の一軒も持つた者ぢやが。商賣の荒道具ひよんな物買合して。思ひも寄らぬ誤り。所拂に夫から散々。六つの年ぢや覺えまい。嬶は一昨年死ぬるまで狀

通に。お豐も今は藤屋の吾妻というて。新町で一といはるゝ太夫になつて。おとなしうなつてゐますと。聞くと共儘飛んで往て逢はうとは思うたがの。それから此さま。よう思へば結構な衣服着た女郎に。おらが樣な雲助が親ぢやというたら。よい幸ひも落ちようかと遠慮は不沙汰よい客が附過ぎて。與五郎殿をようあんなうぼ〳〵にしをつたなア。おのれが事で今も今。親父樣達がすつての事に切つつ拊つつ。聞いてゐた此甚兵衞。術ないと氣の毒なと悲しいと腹の立つと。何程でも涙が止いで。昨日洗うた單物四文が糊を棒に振つた。こりや誰から起つた事。長うはいはぬあの衆に。意見して思切らしませうと受合つた詞がある。久し振で逢うた親が初めての頼みぢや。聞分けて思切つてくれ。此方が思切ると。與次兵衞樣も與五郎樣も。治部右衞門樣もお照樣も。皆えいわい。思切らぬとの。與五郎樣の爲にもならず。與次兵衞樣と治部右衞門樣は。先刻の通りえいやつとう。取分けてお照樣餘りでおいとしぼい。緣といふ物はしよ事もないもの。今日牧方で圖取りの錢繕。長いのに當つたも思はず親子の緣の綱。乘せて來た駕籠の内吾妻と聞いてびつくり。ある緣はしよことがない。丁度それと同じこと。今思切つたとて有る緣なら又逢はれる。何卒思切つて下されや。コレ頼みます。〳〵。命も懸けてゐる中を。思切つてくれというて親が頼む心はまあ。どんなものであらうと思ふ。思ひやつての願ひぢや。コレ聞分けてたも聞分けてと。地啜り上げ〳〵わつとばかりに咽返る。駕籠が涙は息杖の フシ休む隙なき思ひなる。地吾妻は涙押拭ひ。今といふ今迄も父樣ありとは聞きながら。お前を私が父樣とも。知らぬ道筋。フシ勿體なや。野邊の送りの親の輿子が舁くとこそ聞くものを。いかに知らぬといふとても現在親に駕籠舁かせ。乘つた私に神樣や佛樣が罰當てて。なぜに私を逆樣に落して殺して。下されぬ。神や佛が怨めしい。又其上に與五郎樣。退けと フシ仰しやる御意見も。無理とはさら〳〵。フシ思はねど。詞よう思うても見さしやんせお照樣といふ奥樣の。地あるを知りつゝ逢うた客。始の勤め後の色女夫になろとも去らさうとも。微塵も思やせぬけれど。いやな客から請出すと儘ならぬ身は是非なくも。連れて退いたる與五郎樣。輕いお身ならそもないに。逢ひかゝるから。今迄も重る節句年の暮。お世話になつた此吾妻。今又わしゆゑ難儀のお身。任せぬ時に振捨てて。どうまあ義理が立つものぞ。コレ手を合して拜みます。エなあ申しコレなあと。親

に取付き泣く娘。粋な育も涙には譯も。隔もなかりけり。詞ヲツヲさうぢや〳〵。さうなうては濟まぬところ。ぢやけれども其樣に。此方も道理彼方も道理。道理ばかりいうてゐれば。いつついけ同じ事。其道理を思ひ外し。與五郎樣の爲ぢやと思うて。退いてくれ。よ。こりや。親が手を含す思切つてくれ。糸瓜とも思やせんか知らぬけれど。いひかゝつた親が賴み。聞かねばもう破れかぶれ。七生も八升も一斗迄の勘當ぢや。といふは嘘。ヤ。えい人ぢや思切れ〳〵。切れ〳〵〳〵と地迫詰められ。詞アイ〳〵。切るか。アイ。切るか。アイ〳〵〳〵地の涙の際。ありあふ刀拔くより早く。南無阿彌陀佛と取直すコリヤさせぬわ。詞こりや何する狼狽者と。地持つたる刄物もぎ取ればわつと泣き。詞生きてゐる内は思切らうと思うても。どうも思切られぬ得切らぬ。思切らねば一日の恩も送らぬ父樣のお詞背いて勘當受ける。是がまあ地どう生きてゐられうぞ。父樣留めずと殺してと。又取る刀をどつこいと留めてもとまらずいや〳〵〳〵。死ぬる〳〵と競合ふ刀。中から取つたは治部右衛門。詞子細は詳しく皆聞いた。吾妻死ぬるに及ばぬと。地刀を鞘にとつくと納め。詞扨は甚兵衛親であつたか。いかさま樣子あらんとは思うた。其許が子を思ふも。此治部が子を思ふも迷ふ心は皆一つ。子ならで親は泣かぬ物を生れる時を悅びとは。地何時の世からの僞ぞや。詞コレ此刀は五郎政宗金百枚の折紙。地頭より兼て御所望。身を離さぬ重寶なれども。賣代なして吾妻を身請。關破りの科はこの治部右衛門がさつぱりと拔いた上。與次兵衛に臀憤いふ。ヲ、承らう治部右殿と。地奥から出づる與次兵衛が何時の間にやらどつそりと。頭囲めた法體姿。是はと皆々驚けば。詞アツア、治部右殿。有樣は今日來た心も息子めが關破る金でなけりや扱はれぬ。扱や直に親の手から請出してやるも同然。此方の手前冒譯が濟まぬから。氣を搜つて先刻のしだら。金の惜しいも子の可愛さ。金の冥加に盡きる與五郎一文でも溜めて置きや。一日なりと遲う乞食させうと思ひ。せはつたのが今では仇。重代を賣代なし。關破りの科を遁してやろと思うて下さる治部右殿。禮のいひ樣がなさにの。與五郎が惡事を引受け。今からおらが與五郎入道。法名もつけて置いた繹の潛閑。息子めには名を讓つて山崎與次兵衛。門跡樣へも上げぬ金。有りたけこたけ出してなりとさつぱりと濟します。其所にゐるは吾妻女郎。女房にとも約束しやろが。了簡して妾になつて。あの性根の直るやうに賴みます〳〵。お照を本妻に立てて置

いて下され。諸事はこの天窓に免じて。治部右殿あやまりました。言ひこそ召されね息子への恨も何も眞平御免。幾重にもお詫び〳〵と。地悔い親父が打つて變へ耻も惜まぬ平詫に。涙一杯目に持つて頭を下げる親の慈悲。與五郎夫婦は障子から覗いて陰に手を合せ。我が身の不孝を思ひ知り フシ謝り。入るぞ哀れなる。詞サア〳〵〳〵お手上げられい淨閑老。何のそれに及ぶ事と。地心解合ふ相舅同士。頭ばかりか一家中 フシ圓うなつてぞ見えにける。地吾妻は去狀取出しすん〳〵に引裂き〳〵。かうするからは私が心疑ひなされて下さるな。詞ヲヽ、出來した。何もかも目出度い事の上盛と。地悅びあふは富貴の門口庄屋名主があわたゞしく。詞代官所から治部右衞門に。山崎與次兵衞を同道致し罷出でよとの急のお召。地ア何事かは存ぜねどサア〳〵お出でとせり立つる。詞ハテ心得ぬお召ぢやなア。幸ひ與次兵衞爰にゐます。支度して同道致そ其間は待たれぬ急々のお召。サア〳〵〳〵と地忙しなくいふも上沙汰詮方なく。詞サア淨閑老。治部右殿。地參つて來うと打連れだち フシ代官所へと行く跡に。地障子押開け與次兵衞夫婦飛んで出で。詞今のお召が氣遣ひ〳〵。どうせう〳〵と。地狼狽へ騷げばコレ〳〵〳〵。詞何の氣遣ひでさませうぞ。いや〳〵〳〵。吾妻を身請せうといふ屋敷の客。濡髮長五郎が切殺した。其事に就いての詮議であろが。長五郎ぢやとはいはれぬ義理。ア、氣遣ひや〳〵と。地吾妻諸共あぶ〳〵〳〵と氣が氣ならねばよござります。詞此甚兵衞が往て聞いて來て。樣子を先へ知らせましよ。そんなら賴むまつかせと。フシ尻引絡げ飛んで行く。地道が違うて五六人手ん手に寄棒どや〳〵〳〵。詞どうでも爰へ來るやうな隱さにやならぬお前方。地まあ〳〵爰へと上戸棚。夜具引出して二人ながら。サア此內へ〳〵と指圖に洩れず早速の。假の隱家戶を立つる。間もなく亡八がわゝり聲。詞駕籠の者が知らして來た。關破りの與五郎吾妻。廓の法に行ふ出した〳〵。イエ〳〵。そんな覺えは此方にやない。地餘所を尋ねて見さつしやれ。詞ヤアとぼけさつしやるないなう。證人を爰へ連れて來た。地諍ふまいとてつべい押しそれでも知らぬ。詞女ぢやと侮つて嚇かすのか。てもつべこべとよういふわ。可笑しい所に嬉道具が。權兵衞喜六搜そかい。地よかろ〳〵の眞中へ。又どや〳〵と三四人手拭鉢卷高絡。上意を呼ばはり込入り込入り。詞子細あつて治部右衞門に上からのお疑ひ。諸式に封をお付けなさる。それ役人共封印と。地いふより早く手分

けして。押入戸棚も締めたなり箪笥長持膳棚まで。鍋釜萬も打込んで。きり〳〵しやんと封印を。つけるもハア〳〵女氣の フシ怖い〳〵におど顫ふ。詞ヤア皆何奴も頭が高い下げう〳〵。附立の御封印。少しばかりそゝけても。退荷同然科は重罪。屹度申渡したと フシ叱り。つけてぞ立歸る。曲輪の者共うつかりひよん。詞引戻しの蠣ぎりを五々らめに括られた同然。けぶさい戸棚も封印で。大事ない〳〵。五日や六日で濟むまいし。中にをるなら干殺し。地明日來て見ようサア來いとオクリ出て行く。〈跡へ地大汗になつてすた〳〵甚兵衛が。詞サア難しうなつて來た。與五郎樣の事に就いて。長五郎が侍を殺したとあやがぬけいで。お二人ながら揚屋へお入りなされた。地ハアはつと一度に戸棚の内外泣出す。聲に氣のつく甚兵衛。詞與次兵衛樣や吾妻はえ。サア曲輪から詮議に來て。此内へ隠したりや。お上から封印をたつた今付けていんだ。ヤア。もう先へ廻つたか。封印切れば科が增す。というて彼方を此内から。出さずには置かれぬが。地どうした物ぢやこりやどうせう。どうせうぞいのどうせうと。又内外から泣出す聲。詞ヲヽ、其封印は私が切つて上げうと表から。地はひるば以前の役人一人。詞曲輪から詮議にうせる素振を見付け。南無三寶と思うた故。在外れで人雇ひ思ひついた家財の封印。作者は爰にこの長吉と。地鉢卷取れば放駒。詞ヤア長吉殿。そんなら此方が封印附けたか。ヲヲさて折が惡かつて案じさしたと立寄つて。地戸棚明けてもうつかりと物をもいはず出もやらず。詞與五郎樣長吉ぢや。何してござるサア爰へと。地手を取れば きよろ〳〵〳〵。詞ハヽア詮議にくる〳〵。親父樣はずんぼろ坊。坊主々々小坊主。歌いたいけな事いうた。ほろゝん〳〵〳〵や。詞これ何いはしやます。長吉ぢやわいなう。何ぢや町中引渡す。コレ與次兵衛樣何いはんす。申し〳〵何仰しやる。今のをお聞きなされて。はつと思うてそれでお氣が上つたか。コレ地氣をつけて下さんせと。二人の女が取付いて。スエテ泣く顏じろ〳〵打眺め。歌其方は藤屋の吾妻かの。合吾妻請出す山崎與次兵衛。詞曲輪を拔けてそれ〳〵〳〵〳〵。名代の走り坊。しつたん〳〵や。法ぬけ坊主。これは扨とほる。地當度もなしに駈出す。ソレ留めましてと捕ゆる吾妻。氣違力の手に合はねば。どつこいやらぬと長吉が。留めても。留らず引きずられ共に。狂ふや。三重

第七　道行菜種の亂咲

大隅へはてしなく。フシ狂ふ與次兵衛を。

信濃 地 長吉がスエやう〳〵抱き留むれば。長門 なう正體なきお身の上。吾妻が顏も見忘れてか。これなう〳〵と。縋り泣く長 フシ浮名の種や。栄種畑。土佐ヲ、イ。信 ノ〳〵。地 呼ぶも木精も春風に。フシオクリ 連れて〳〵桶樂の頭冠堤傳ひをそれぞとは。思ひがけなや。信 詞ヤア濡髮か。土ヤレ吾妻様放駒。長 地 是は〳〵珍らしや。信 詞不思議に廻り大阪の人目を忍ぶ身を以て。此道筋を何處へ行く。土されば我故御難儀と聞捨てならず。我と名乘つて出る覺悟。地 先づ旦那のお顏を。信 土二人立寄り抱上ぐれば。大隅 むつくと起きて。詞ヤア長五郎か。コリヤ長吉。われも長。われも長。二人合せて 地 蝶々とまれ。栄種にとまれと枝折躍し。本フシ春にも育つ花誘ふ。詞 長吉は情の味知らず。半仲節 長五郎は我が譯知らず。知らず知られぬ。中ならば。ギ、浮れ初めまい。ナホスフシ狂ふまいと。栄種を持つてて〳〵〳〵ど。信 土二つのてふ〳〵打たれて二人も顏見合せて立寄るを。大隅 詞イヤ〳〵知らぬ。何にも知らぬ。三下り歌 今は浮世の放駒。傍で見るめの憂やつらや。信 詞あれ見やあの通りぢや。どうも御兩家へ連れてはいなれぬ。この長吉が所にまあお隱匿ひ申さうかと思うてゐる。土ムウ尤も。重々の世話忝い。連れまして往んでたも。大隅ヲ、いの。おれもいの。歌 いのやれ。合我がふる。さとへ歸らうやれ。詞といふは些と持たせ風。ハ、アふりかけて來るわ〳〵。何と吾妻久しや〳〵。義歌 吾妻は遠き國なれど。又都にも双びなき。難波に稀な太夫職。二上り いつかは見染め逢初めてかの井筒屋の月見の夜。倶に可愛う。なり初めて花ならば連理の枝。鳥ならば比翼の鳥。變るまいぞや ナホスフシ變らじと。フシいひ交したは。地 違はぬ〳〵四季の花。春は朧に八重霞。ハメミ柳は綠花は紅。フシ共紅の。内でゆかしき。ゆかし懐かし逢ひたしと狂ひ。廻り駈け廻り フシ草葉に。かつぱと伏しゐたる。長 地 吾妻はわつと泣出し。父御様の御難儀も亂心も皆私故。お心の付く様に仕様はないか長五郎様。何卒療治もない事かと。夫の介抱片袖は涙を。フシ留め兼ねければ。土 詞ヲ、其歎も今の間に科を名乘つて出る上は。御病氣も御難儀も一時に事が濟む。信 イヤ〳〵惡からう。今汝が名乘つて出ると。與次兵衞殿から事起ると却つて家に疵が付く。隱れるだけ隱れるが却つてお爲ぢやコリヤ。長吉が詞を立てよ。土イヤ〳〵それでも。信 イヤ〳〵〳〵。大隅 地 競合ふ中へ割つて入り。半仲 あれ〳〵〳〵。詞あの行く舟は京上り。ちゝり人形かなぎさ堤を曳くわ〳〵。三下り歌 川の瀨のせのナ。なゝせのあはびノつまもナ。つまもたいでようさ

まよヲ、瀬でくらす。合様は三夜のナ。三日月様よノ宵にナ。宵にちらりとよう様よヲ、見たばかり。大オンド長踊人が見たくば色里へおぢやれの。色里の踊は。花笠をしやんと着て踊振が面白。吉野初瀬のオトシ花よりも。下ギン紅葉よりも。大戀しき君が共顔見ようと走り行く。信やらじと留むる放駒。詞氣遣せずと濡髪は河内の方へをちこちの。人も咎めん往け〳〵〳〵。地ひらに牧方別れ道さらば〳〵。土詞長吉頼む。地〳〵〳〵と聲ばかり入相告ぐる鐘の音に。長大花も。散り行く。栄種畑所。隔てて三里へ落ちて行く

第八　八幡の親里に血筋の引窓

歌出入るや月弓の。八幡山崎南與兵衛のお祖母。我が子可愛かナ金を出せナホスフシさと諷ひしを。地思合せば其昔。八幡近在隱れなき郷代官の家筋も。本フシ今は妻のみ生殘り。地神と佛を友にして秋の半の放生會。夜宮祭と待宵と掛荷うたる供物。長地母は神棚しつらへば嫁は小芋を月代へ。子種頼みの米團子。フシ月の數程持出づる。詞コレ嫁女。月見の芋は明日の晩今日は待宵。殊に日の中からは早い〳〵。これはしたり。お前が明日の放生會を。今日からお供へ遊ばす故。何にもかも宵日からする事とヲ、笑止。コレそのヲ、笑止はやつぱり廓の詞。大阪の新町で。都というた時とは違ふ。今では南與兵衛が女房のおはや。近所の人が來たと。煙草吸付けて出しやんなや。今でこそ零落れたれ。前は南方十次兵衛というて。人も羨む身代。地連合がお果てなされてから與兵衛が放埒。郷代官の役目も揚り内證も仕縮れ。此方の手前も恥かしい事だらけさりながら。詞此所の殿様もお代りなされ。新代官は皆あがり。古代官の筋目をお尋ねにて與兵衛も俄のお召。昔に歸るは此時と。雜行なれども神いさめの供物。蚕の息が天とやら。お上の首尾が聞きたいの。イヤモウそれは御氣遣ひ遊ばすな。お前のそのお心が通じて。御出世でござりましよ。地早う吉左右聞けましたやと。フシ待兼ね見やる。地表の方編笠にて顔隱し。世を忍ぶ身の跡や先。見廻し立寄る門の口。嬉しや爰ぢやとづつと入る。地母は見るより詞ヤア長五郎か。母者人。濡髪さんか都殿これはしたり。扨は願ひの通り與兵衛殿と夫婦になつてか。マア悦んで下さんせ。私を請出した權九郎は。根が暦金師で牢へ入る。殺された幇間は。盗人の上前取りで追剝になつて殺し德。何の氣がかりなう添うてゐやんす。ハテ幸福な事。同じ人を殺しても。運のよいのと悪いのと。ハテ幸

福な事ぢやの。イヤコレおはや。染々とした話ぢやが。其方衆は近付か。アイ曲輪でのお近付。あの與兵衛もか。イヤこれはつい一目知人ぢやが又長五郎様がお前を。母様と仰しやる譯はえ。ヲ、不思議なは道理々々。どうで一度は言はねばならぬ。この長五郎は五つの時蓑子に遣つて。私は此家へ嫁入。與兵衛は先妻の子で。私とはなさぬ中故に。地其譯知つてもしらぬ顔あそこや爰の手前を思ひ。かつふつ音信もせなんだが。去年開帳參りに不圖大阪で見付け。詞年たけても父御の讓の高頬の黒子。もし其方は長右衛門殿へ遣つた。長五郎ではないかと。問うつ問はれつ昔語り。地蓑子の親達も死失せ相撲取になつた咄。歸つて與兵衛に咄さうかと思うたれど。以前を慕ひ尋ねても往たかと。思はれるが耻かしさに隱してはゐたが。詞かうしらけて來たからは。戻られたら引合し兄弟の盃。負はず借らずに嫁共に子三人。地私程果報なる身の上は又と世界にあるまいと悦ぶ親の心根を思ひやる程長五郎。明日をも知れぬ我が命と。知られぬ母の痛はしやと。思へばせき來るフシ涙を隱し。詞イヤ申し母者人。與兵衛殿がお歸りあらうと。拙者が事お咄し御無用。なぜ〳〵。イヤ相撲取と申す者は。人を投げたり放つたり喧嘩同然。勝負の遺恨によつて。侍でも町人でも。斬つて〳〵斬りまくり。ぶち放してマアそんな事私は致しませねど。男をたて通して。一家一門へ難儀の罹る事もあるもの。まあ此商賣しまふ迄は。お前ともあかの他人。悴持つたと思召して下さるな。何時知れぬ身の上。これがお別れにならうも知れず。おはや殿。與兵衛殿へも母の事賴みまするというて下され。長崎の相撲に下りますれば。永うお目にかゝりますまい。地隨分御息災でお暮しと。打萎るれば詞ヤレそんな商賣せいで叶はぬか。長崎へも何處へも往かずと此内にゐて。與兵衛と共に閑談合。其かつぽくでは何さしたとて仕兼ねはせまい。ナウおはや。さうでござりますとも。御兄弟といふ事主も聞かれましたら悦ばれましよ。マアお茶漬でもナお袋様。イヤ〳〵初めて來たもの鱠でもしませう。あの體は牛房の太煮。鮪の料理が好きであろ。氣が晴れてよい二階座敷。淀川を見て肴にして一つ飲みや。うぢ〳〵せずと往きやいの。地どりや拵よと俎板や薄刃の錆は身より出で。死出の出立の料理ぞと。思へばいとゞフシ胸塞がり。詞申し何にもお構ひなくとも。缺椀の一盃ぎり。ついたべて歸りましよと。地母の手盛を牢扶持と。思ひ諦め煙草盆。オクリ提けて。〽二階へ萎れゆく。地人の出世は時

知れず見出しに預り南與兵衛。衣類大小申請け。伴ふ武士は何者か。所目馴れぬ血氣の兩人。家來も其身も立留り。詞これが貴公の御宿所とな。イザ御案内。地お先へと互に辭儀合ひ南與兵衛。フシいそ〳〵として内へ入り。詞母者人女房。只今歸つた。ヤアお歸りか。戻りやつたかお上の首尾はどうぢや〳〵。お悦びなされ極上々。マア嬉しい。則ち此如く衣類大小下し置かれ。名も十次兵衛と親の名に改め下され。昔の通り庄屋代官を仰付けられ。七ケ村の支配。ヤレ〳〵それは目出度い事。見れば表にお歴々が見えるがありやどなたぞ。あれは西國方のお侍。密々に仰合さるゝ事あつて御同道。さして隱す程の事ではなけれど。暫く母人も御遠慮。地女房も用事ある迄差控へよと云渡し。表へ出づれば嫁姑。今からは武士交際遠慮が多いと物馴れし。母と嫁とは立別れフシ奥と口とへ入りにけり。地イザお通りと兩人の武士を上座へ押直し。詞今日殿の御前にて仰付けられし縞の御用。子細は各々方に承れとの儀。先づそのお尋者の科の樣子。地お物語と尋ぬれば。年長なる侍取敢へず。詞拙者は平岡丹平。これなるは三原傳藏と申して。主人の名はお上には御存じ。當春大阪表にて兩人の同苗共を殺され。方々と詮議致せど。討つたる相手行方知れず。此間承れば此八幡近在に。由緣あつて立越えたと申す。さるによつて當役所へお賴み申せしに。兄弟の敵隨分見付け召捕られよ。併し夜に入つては當地不案内。所に馴れたる者に申付け。繩かけ渡さんとあつて貴殿へ仰付けられた。子細と申すはかくの通りと地語るを一間に母親か。耳欹てれば此方には。女房おはやが立聞の。蟲が知らすか胸騷ぎ。地與兵衛は何の心も付かず。詞然らば敵討同然隱密隱密。もし左樣の儀もあらうかと。母女房迄退け御内意を承る。何と。その討たれさつしやつた御同苗のお名はな。身が弟は鄕左衛門。手前が兄は有右衛門。アノ平岡鄕左衛門三原有右衛門。いかにも。フムウ御存じかな。イヤ承つた樣にも。ムウ。してその殺したる者は何者。サア其相手は相撲仲間で隱れもなき。濡髮の長五郎と。地聞いて母親障子をぴつしやり。おはやは運ぶ茶碗をぐわつたり。ハテ不調法なと叱る夫の傍に坐し。フシ猶も樣子を聞きゐたる。詞シテ御兩所は何國を目當。先づ此丹平は當所を家捜しが致したい。御尤も〳〵。傳藏殿には思召寄りは何と。手前が存ずるには。最前其許へお賴み申した繪姿を村々へ配り置き。油斷の體に見せどか〳〵と踏込み。牛部屋柴部屋。或は二階などを吟味致したい。

それも尤も。ア、大きな體。下家にはをりますまい。兎角二階が心許ない。先づ御兩所は楠葉橋本の邊を御詮議なされ。夜に入らば拙者が受取り。假令相撲取でござらうが。柔術取でござらうが。見付け次第に繩打つてお渡し申さん。其段そつとも。ヤレ其詞を聞いて安堵々々。イザ丹平殿。楠葉邊へ參らうか。いかさま日の内は隨分我々働き。夜に入つてお頼み申すが肝心。早やお暇。然らば又晩程役所にて御意得ませう。地左樣々々と目禮し。フシ二人の武士は立歸る。地おはやは始終物案じ。さし俯向いて居たりしが。申し與兵衛樣。味な事を頼まれなされ。長五郎とやらを捕つて出そとの請合は。そりやマアお前ほんの氣かえ。ハテ氣疎い物のいひやう。あの侍に由緣もなく。元より長五郎に意趣もなけれど。今の兩人が願によつて。お上より此與兵衛に仰付けられた其子細は。關口流の一手も。覺えをる事お聞及びあつて。役人共に申付くる筈なれども。當所へ來て間もなく不案内。住馴れた其方に申付くる。日の内はあの方より詮議せん。夜に入つては此方より隅々迄詮議し。何卒搦め捕つて渡せ。國の譽とあつてのお頼み。地一生の外聞召捕つて手柄の程を見せたらば。母人にも嘸お悦び。詞イヤ〳〵〳〵何のそれがお嬉しからうぞ。なぜ。ハテ昔はともあれ。昨日今日まで八幡の町の町人。地生兵法大疵の基と。ひよつとお怪我でもなされた時は。お袋樣の悲しみ。何のお悦でござんせう。詞イヤいらざる女の差出。わりや手柄の先を折るか。地ハテ折るも一つはお前の爲詞ヤア此奴が。何で濡髮を庇ひだて。但しは汝が一門か。地何にもせよ御前で請合ひ。見出しに逢うた此與兵衛今迄とは違ふ。詞返さば手は見せぬと切刃廻せば。詞ヤレ夫婦の諍ひ必ず無用と。地母は一間を立出で。詞最前からの樣子殘らずあれにて聞きました。何と其濡髮長五郎といふ者。其方よう見知つてか。一度堀江の相撲で見受け。其後色里にて一寸の出合。隱れもない大前髮。慥か右の高頬に黑子。見知らぬ者もあらうとあつて。村々へ配る人相書。地コレ御覽なされと懷中より。出して見せたる姿繪を。どれと見る母二階より。覗く長五郎手洗鉢水に姿が映ると知らず。目早き與兵衛が水鏡屹度見付けて見上ぐるを。敏きおはやが引窓びつしやり。フシ内は眞夜になりにける。詞ヤこりや何とする女房。ハテ雨もぽろつく最早日の暮。灯を點して上げませう。ムウはてなあ。面白い〳〵日が暮れたれば此與兵衛が役。忍びをるお尋者。地イデ召捕らんとすつくと立つ。それ。まだ日が高

いと引窓ぐわらり。明けていはれぬ女房の。フシ心遣ぞせつなけれ。地母は手箱に嗜みし銀一包取出し。詞これはコレ御坊へ差上げ。永代經を讀んで貰ひ。未來を助からうと思ふ大切な銀なれども。手放す心を推量して。何と其繪姿。私に賣つてたもらぬか。ムウ母者人。二十年以前に御賣子を。大阪へ養子に遣はされたと聞いたが。何と其御子息は堅固でござるか。與兵衛。村々へ渡す其繪姿。何卒買ひたい。ハア、鳥の粟を拾ふ樣に溜め置かれた其銀。佛へ上げる布施物を費しても。此繪姿がお買ひなされたいか。未來は奈落へ沈むとも。今の思ひには替へられぬわいの。地ヘツエ。是非もなやと大小投出し。詞兩腰差せば十次兵衛。丸腰なれば今迄の通りの與兵衛。相變らず八幡の町人。商人の代物。お望みならば上げませう。あの賣つて下さるか。それでは此方の。ハイヤ日の内は私が役目ではござりませぬ。地ハア、忝やと戴く母。地袖は變らぬ涙の海。嫁は見る目をフシ押拭ひ。詞イヤ申し與兵衛樣。あんまり母御樣のお心根が痛はしさに。大事の手柄を支へました。嘸憎い奴不屆者と。お叱りもあらうが。產の子よりも大切に。可愛がつてくださる御恩。地せめてはお力にと俱々に隱しました。常々からも萬事の品包むと思うて下さんすなと。中に立つ身の切なさをスエ言譯。涙に時移り。あはれ數そふ暮の鐘中オクリ隈なき。へ月も待宵のフシ光映ゆれば。詞イヤ夜に入れば村々を詮議する我が役目。河内へ越ゆる拔道は。狐川を左に取り。右へ渡つて山越に。よもやそれへは行くまいと。地それと知らして駈出づる情も厚き藪疊。折から月の雲隱れ忍びて。樣子を窺ひゐる。地堪へ兼ねたる長五郎二階より飛んで下り。表を指して駈出すをフシ母は抱止め。詞コリヤ狼狽者何處へ行く。イヤ最前より尋常に繩掛からうと存じたれども。餘りと申せばお志の

有難さ。眼前獄を見せませうよりは。此家を離れてと。堪へに堪へてをりましたが。與兵衛殿の手前もあり。地跡よりぼつ付き捕れる覺悟。御赦されてと駈出すを取つて引据ゑ。詞ヤイこゝな物知らずめ。おればかりか嫁の志。與兵衛の情まで無にしをるか罰當りめ。なさぬ中の心を疑ひ。綿姿買はうといひかけたは見遁してたもるか。たもらぬかと。胸の内を聞かう爲。賣つてくれた其時の嬉しさ。おりや後影拜んだわいやい〳〵。まだ其上に河内へ越える抜道まで教へてくれた大恩を。何と報じようと思ひをるぞ。コリヤヤイ死ぬるばかりが男ではないぞよ。地七十近い親持つて喧嘩口論。人を殺すといふやうな不孝な子が世にあらうか。詞來ると其儘缺椀に。一膳盛と望んだは。おのりや牢へ入る覺悟ぢやな。それがどう見てをられうぞ。せめて親への孝行に遁れるだけは遁れてくれ。地生きられるだけは生きてたも。何の因果で科人に。なつた事ぢやとどうど伏し前後。フシ不覺に泣き叫ぶ。地おはやも俱にせきのぼす涙押へて。詞申し〳〵。泣いてござる所ぢやないぞえ。夜が明くれば放生會で人立が多い。今宵の内に落す思案。何卒姿を變へる仕様はあるまいかな。ヲ、それも心付いて置きました。まあ目に立つ此大前髪。剃落しましよドレ剃刀。イヤ申し母人。姿を變へて繩掛からば。よく〳〵命が惜しさにといはれるも無念な。侍を殺した場で。直に相果てうと存じましたが。死なれぬ義理にて生存へ。一日々々と親の事が身に浸み。ま一度お顔が拜みたさに。お暇乞に參つて。却つて思を掛けまする。やはり此儘で與兵衛殿へ。お渡しなされて下さりませ。スリヤどういうても繩掛かる氣ぢやな。覺悟致してをりまする。よいわ勝手にしをれ。地汝より先にと剃刀をア、申し。詞誤りました。〳〵サアそんなら剃つて落ちてくれと。地母が手づから合砥にかゝる思があらうとは。神ならぬ身の。地白髪の此身。地剃るべき髪は剃りもせで。祝うて落す前髪を。フシわな〳〵震うて刄先がきつくり。詞ア申し二所迄お顔に疵が。ハアひよんな事しました。地幸ひ血止と硯の墨。べつたりつけて顔打眺め。詞大方これで人相が變つたか。肝心の見知は高頬の黒子。地剃落さんと剃刀を當てことは當てながら。是こそは父御の讓り。形見と思へば嫁女。私はどうも剃りにくい。詞此方賴む剃落して下され。私ぢやとてむごたらしう。それがどう剃らるゝもの。お赦しなされて下さりませ。ア、思へば〳〵。親の形見まで剃落すやうになつたか。エ、心から

とはいひながら。地可愛いのものやと取付いて ッェわつとばかりに。泣沈む。地折もこそあれ門口より。濡髪取つたと打付ける。かねの手裏剣高頬にぴつしやり。はつと身構へ母は楯。おはやは燈火立覆ひ。詞今の は慥か連合の聲。長五郎さん。顔の黒子が潰れたぞえ。ヒヤアほんに眞に。これも情と母親は。フシ表を拜みぬたりしが。地豫て覺悟の長五郎。思ひ設けてどつかと坐し。詞サア母者人。お前のお手で繩を掛け。與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ。コレ長五郎様。お前は氣が逆上つたか。取つたと顔へ打付けて。黒子を消した連合の心。又コレこの打付けた銀の包に。路銀と書いた一筆。そこにお心付かぬかえ。イヤ其書付も黒子を消した心も。骨に徹へ肝に通り。餘り過分忝さに。母の歎も御意見も。不孝の罪もッシ思はれず。地かたはな子が可愛と義理も法も辨へなく。助けたい〳〵と母人の御慈悲心。暫くはお心休めと詞に隨ひ。元服まで致したれども。詞一人ならず二人ならず。四人まで殺した科人。助かる筋はござりませぬ。憖かな者の手に掛からうより。形見と思ひ母者人。泣かずとも繩を掛け。與兵衛殿へ手渡して。ようお禮を仰しやれや。ヤ。ヤ。コレこれ。さうなうては此方。未來の十次兵衛殿へ立ちますまいがの。ヲ、誤つた長五郎。よういうてくれたな。いかさま思へば私は大きな義理知らず。地眞をいはゞ我が子を捨てゝも繼子に手柄さするが人間。畜生の皮被り。猫が子を銜へ歩く樣に。隱し遂げうとしたは何事。詞とても遁れぬ天の網。一世の緣の縛繩。おはや其細引でも取つて下され。地イヤそれでは連合の心を無になさるゝと申すもの。唐天竺へござつても。此世にさへござれば如何してなりとも又逢はれる。何かはなしに落しまして下さんせ。詞イヤなう一旦庇うたは恩愛。今又繩掛け渡すのは生さぬ中の義理。晝は庇ひ夜は繩掛け。地晝夜と分ける繼子本の子。慈悲も立ち義理も立つ。草葉の蔭の親々への言譯。詞覺悟はよいか待兼ねてをりまするとと。地おはやを取つて突退け〳〵。手を廻すれば母親は。幸ひ在合ふ窓の繩押取つて小手縛り。突放せば引繩に。窓は塞がれ フシ心も闇。地暗き思の聲張上げ。詞濡髪長五郎を召捕つたぞ。十次兵衛は居やらぬか。受取つて手柄にめされと。地呼ぶ聲に與兵衛は駈入り。詞お手柄〳〵。左樣なうては叶はぬ所。とても遁れぬ科人。受取つて御前へ引く。女房どももう何時。されば夜半になりましよか。たはけ者めが。七つ半を最前聞いた。時刻が延びると役目が上る。繩先知れぬ窓の引繩。三尺

殘して切るが古例。目分量に是からとすらりと拔いて縛繩。ずつかり切ればぐわら〳〵〳〵。さし込む月に。詞南無三寶夜が明けた。身どもが役は夜の内ばかり。明くれば則ち放生會。地生けるを放す所の法。恩に被ずとも勝手においきやれ。ハはつと悅ぶ嫁姑。合す兩手の數よりも。九つの鐘六つ聞いて。殘る三つは母への進上。拙者が命も御自分へ。それもいはずとさらば。〳〵。さらば。〳〵の暇乞別れて。こそは 三重へ落ちて行く

第九　觀心寺の隱家に戀路のまぼろし

地河内の國の片邊に幻竹右衞門といふ親仁あり。心に歪む節もなく。正直一遍齒に衣を着せねど付けし里の名は。錦郡に侘住居近所の若者入込んで。相撲稽古の地取場は。裏の緣先緣側に。煙管銜へて寢腹這ひ。詞コレ〳〵〳〵腰が悪いぞ。右を指したらなぜにはたかつて歩み出さんぞやい。エ、其所ぢや〳〵そりや其所な。先刻にから見て居るが皆身の構がさうでないわい。今の様な時はト矢筈になつて止つて居る。向うから仕掛ける所で右へなりとソレ左へなりと揑ねたがよいとフシ仕形見すれば。詞ア、親仁殿此方

のやうに覺えて居れば。大坂へ往て土俵の上で取りますわいの。さいやい。其方達は土俵の上でも耻しうない。春は早々この觀心寺の開帳。其時は是非相撲勸進元はこの竹右衛門。一方は大坂方。寄の方は汝等を關取。皆おれが世話やいたれば。何卒大坂方に勝たしたいがな。イヤそりや取つて見たいな。ヲヽさうぢや。〳〵〳〵。したがおらは名がない親仁殿。性を見てえい名を付けて下され。あいつわい。おれをば山伏の樣に思ふさうな。マア大關を誰にせうぞ。ヲヽ。さつきから土付かぬ此次郎吉。おれぢや〳〵。ム、次郎よかろ。わりや在所はどこぞ。ハテ知れた澁川郡。イヤ澁川郡とは名乘りにくかろ。何卒强さうな何にせう。大和邊の緣を取り。御所車イヤ〳〵。餘り名過ぎる。澁川郡の心で御所柿〳〵。ヲヽその御所柿よかろ。マア甘い名ぢや。

地 イヤおれが好きぢやと口々に評ふ折から フシ奥よりも。詞 申し父樣。風呂がよい 地 お召しなされと立出づる娘のお虎。詞 ヲヽ、客人は入られたか。アイ濡髮樣は。コリヤ〳〵娘。濡身では風引く。浴衣着せてなぜ。背中すつて進ぜぬぞ。ちやと往け〳〵。イヤ此間から江戸の客人。春の相撲の大關又おらとは違うて。第一若

し大兵。何と御所柿一番いて見んかい。是はよかろイヤおれぢや。おらも地取らして〳〵と。ざわつく内に浴衣がけ。地揺ぎ出る長五郎。詞ヲイ綾川殿風呂へ入つてか。親仁殿辭儀なしに入りました。扨えい加減お入りなされ。ホ、これは皆若い衆。寒取前で精が出やんすよ。イヤ闘取。皆若い者共がいかう貴様を見たがつてゐた。慰みがてら敎へて遣つて下されぬか。イヤ〳〵それは慮外。見れば達者さうな骨組。名乘は皆付きやんしたか。アイ。私が名は御所柿此村の大闘でえす。いや何れも〳〵丈夫なつくり。ドレ。一番地揉んで見ようと。浴衣ひらりと飛んで下り。四股踏固むる力足。地見るより俄に後退り。詞マアわれ往け何いふぞい。誰が取らうというたぞいマアいけ。〳〵。エ、誰の彼のと一時に皆掛かれやい。イヤ。竹右殿さうでない。私も久しう地取もせず。サア御所柿とやら。地揉んで見ようと。呼びかけられて顫ひ〳〵。詞親仁殿行司か後から屹度押してゐて下はれや。エ、卑怯な御所柿。灸据ゑるやうに思ふさうな。そりや〳〵〳〵。其所ぢやハア。もう仕舞ぢや。サア〳〵〳〵續いて掛かれ。郡川の勘兵衛が。目玉いからし取付けば。フシ首じやくり。地古市の丸十郎が。かゝると其儘フシカヽリそつ首落しにヤこりやならぬと。フシ砂打拂へば。地そこらは譽田の善助が四股踏みならし。皆退け〳〵〳〵。詞地體わいらが闘取にぎつちりと取るによつて今の通りぢや。なぜあへて取らんぞやい。サア參らう地掛かるや否やコリヤ〳〵〳〵〳〵と。地刎ねかけられ。さしもの濡髪背ける五體。コハリ所を透さず後抱にしつかと緊め。詞コリヤ見たかと引抱へ上げても。〳〵。フシ地放れせず。詞幻掛聲。そりや〳〵其所ぢや〳〵腰入れ〳〵合點ぢや地コハリ合點と根一ぱい。力めば左の片足が。向うの股へ歩み出で。其足取つて仰向に。ナホス。もたれを食うてひつしやりと。地獄落しの餅重ね砂に埋れ減ず口。詞テモようした物ぢや親仁殿。是では名乘がつくまいかの。つくとも〳〵。えい名があると煙管を揚げ。只今の負相撲。片やにおいて平蜘々々。ハ、、、。エ、面倒な。サア〳〵〳〵皆一時に組付け〳〵ヲヽサ合點。皆腰入れて。エイヤ〳〵〳〵押せ〳〵〳〵。サアもうえいかと一押し地押されて夕彌堪られず。將棊倒しにばた〳〵〳〵とフシこけ廻る折も折。詞村の役人いつきせき。詞申し〳〵竹右衛門様。庄屋殿より言ひつけ。大坂の濡髪といふ相撲取が。人を殺して此觀心寺村へ入込んだ。括つてなりと捕へて置け。明日は早々大坂から侍衆が見える筈。今夜中に下相談。竹右衛門所は

取分け。若い者が入込む程に早う呼んで來いとでこざります 地ちやつと〳〵といひさして。 フシ次の在所へ走り行く。 地幻はそしらぬ顏。詞何と皆聞いたか。濡髮とやらが侍殺して駈落した事。此商賣なれば知らぬでもないがわい等は若し知らぬか。イヤ此中から其噂。こちの方へも觸が廻ろサア來い。皆いのかい。ヲ、竹右衞門も庄屋へ往て譯立てう。 地お虎は何處に。娘。娘と呼出し。詞コリヤ酒でも燗して綾殿へ進ぜ。表も締めておけ。誰ぢやあらうと迂濶に明けな。 地皆來い〳〵と オクリ打連れ。てこそ急ぎ行く。 地跡に濡髮只一人。枕引寄せ煙草盆心も。 フシ濟まぬ後より。 地お虎は銚釐に酒の燗。片手に肴取添へて。詞申し〳〵長五郎樣サア御酒上がれ。申し。私ぢやナ。お前の身の難儀も皆知つてゐる。けれど。呑込やの父樣が合點なりやつい濟むであろ必ず苦にして煩うてばし下さんすな。幸ひ父樣も留守。アノナ。私やいふことが澤山ある。長五郎樣。日外から此内へお出の時。一目見るよりテモ扨も屹として色白なえい殿御と。 地思初めては夜も寢られず。文で委しういうて見んと廻らぬ筆で認めた。詞其文も何處でやらつい落した。耻かしい私が方から 地寢間へいきや。嫌ぢや。〳〵と頭振ばかり。すど〳〵寢間の一人寐も。お前のお顏が幻に見ゆるとすれば憎てらしい父樣の車長持吃驚し。起きれば現にちら〳〵と。暮るれば夢に長五郎樣。心で心が悟られぬと。娘心のくど〳〵と悔み恨めば。詞ム、成程成程。志は忝い。何の其方の其心惡うは受けぬさりながら。此長五郎が身は今も知れぬ命ぢや。愁か情らかしい事いうたらすはといふ場に其方の歎き。マア〳〵第一は親仁殿が。ア、長五郎といふ者は我が身に難儀ありながら。人の世話になる上。一人娘にまで。歎き悲む憂目を見する人でなしと思はれては。今迄男といはれた濡髮が分も立たぬ。爰の道理を聞分けて。酷い長五郎ぢやと思うてばし下さるなと。 地事を分けたる一言に。詞サイナ。 地其所を無理にといふ私でもない。お身に難儀のある事まで知つて居てこの思。詞はて何とせう。仕舞は尼になる覺悟。必ず未來で添うて下さんせと。 地立派にいへどもぢ〳〵と。 フシ心殘りの折からに。 地竹右衞門はとつぱかは門の戸敲いて。詞お虎〳〵ちやつと明け〳〵。 地あいと娘が鍵を。はづせば駈入りはたと締め。詞サア長五郎。大事ぢや〳〵。裏は觀心寺の藪道。それを右へ行けば大和へ抜けるそれから先は根次第サア〳〵早う。〳〵と 地急けども急かず。詞親仁殿何の事。エ、何の事とはづきが廻つて。

侍共が古市に宿取つて明日は早々此村へ来る筈ぢやわい。竹右衛門が所にゐる綾川こそ。お尋ねの濡髪と村の奴等が注進。古市へ只今と聞いて顚倒。サア〳〵〳〵早う〳〵〳〵〳〵。ヱ、段々の世話。禮は詞に盡し雖しさりながら。迚も遁れぬ長五郎。母者人の詞を立て。地一旦は落ちたれどもノコレ義理ある兄の十次兵衛。詞此人に搦められねば母への不孝。其外の侍共は。切つて〳〵切抜ける氣。もし其古市に居らるゝ侍が。兄十次兵衛殿なればと地駈出づるを押留め。詞コリヤ〳〵〳〵待て〳〵其十次兵衛殿とは此中われが話した。南與兵衛の事ぢやろがな。何の其十次兵衛が。百姓づれを頼みにして。其方を括つて連れて來いなぞといふ様な武士ぢやないわいやい。コリヤやい來てをる侍はな。汝がばらした郷左衛門有右衛門めが兄弟共ぢやわい。とても括らるゝ氣ならなぜ十次兵衛に括られぬぞやい。其所を思うて一先づ落す氣。一つには。アヽ何卒して助けてやりたい。もし爰で縛られたりやお虎めが泣えをろとそれがおりや悲しい。此中緣先で拾うた文何心なう見たれば。娘が貴樣へ付文。テモ扨も。地親はなうても子は育つ。詞陰裏の豆も見ん事おとなしい氣になりをつた。嬶が居たらば悦ばうにと。地嬉しい半分悲しい半分。詞竹右衛門が娘ぢや。まさかの時。未練な氣持つ奴ぢやござらぬ。たつた一言コレ女房ぢやというてやつて下され。賽の河原へ往きをろかと地それが悲しい。〳〵〳〵〳〵とどうど伏して咽返れば。娘は父を伏拜み。親のお慈悲とばかりにて添け涙にくれにける。詞ム、誤つた。十次兵衛殿に義理のある身。是から直に和泉路へ。それから先は又先での分別。ヲ、聞入れあつて過分々々。併し餘り夜深は又氣遣ひ。コリヤ娘ソレ出立拵へ。おれも些との間休まうと。地滿團一枚丸寐の夢。お虎も夢の夫婦連オクリ打連れ。ヘ一間に入りにける。フシ早更け渡る。山寺の。鐘も現や九つの。爰ら目馴れぬ。大男夜の編笠大脇差。跡に忍の侍二人付込み來るとも知らぬ顏。門口に大聲上げ。詞竹右衛門殿といふは爰で地ないかとつかうどにふつと目覺し。詞夜更けて誰ぢや。竹右衛門は爰ぢやが何の用ぢや。イヤ氣遣な事ぢやない。人を殺して大阪からふけつたのぢや。マア爰明けて下はれ濡髪長五郎ぢやと。地聞くより外の侍二人が呼合ひ。フシしてやつたりと走り行く。地幻は合點せず。詞てもさつぱりとした長五郎。其樣な長五郎に近付はない。イヤ親分殿この長五郎に用事あつて大阪より長吉が地來りしものと戸を明くれば。詞ヤレ長五郎か。長吉か。

互に堅固で目出度い嬉しい。イヤ。竹右衛門殿には始めて。話せば長い摘んでいふ。與次兵衛殿も病氣本復。吾妻殿はお妾分。お照殿は御本妻。廓の出入も何もかも。淨閑殿の銀の威光でさらりと埒明きめでたいだらけ。ぢやが埒の明かぬは彼の郷左衛門めが言拔け。郷左衛門めが一家共一つになつて。明日早々此村へ捕りに來る其噂聞くより只一飛び。跡は此長吉に任せて一先づ落ちよ。元服したも幸ひ〳〵。サア〳〵 地 早う〳〵と迫立つるフシ 男の意氣は格別なり。 詞 イヤ〳〵さうでない長吉。濡髮が爰にゐながら。此方衆に怪我あつては。いよ〳〵立たぬ。コリヤやい長五郎。長吉殿の今の程事を分けていはるゝに。この幻が詞も聞かず踏留まつて搦め捕られ。その十次兵衛殿にや何手柄さす。イヤ母への孝が立つか。義理が立つか。ヲ、さうぢや。この長吉が折角爰までしらせに來た。志を立てさせぬはエ、曲がないぞよ長五郎。イヤそれでも爰を逃げたといはれては立たぬ。イヤ立つ〳〵。コリヤやい。長吉が詞わりや何と聞くぞいやい。十次兵衛殿の今宵の泊は高安郡。其高安へ往て。十次兵衛殿に逢ひさへすりや。遁げたのではないナ 地 落ちよ〳〵と兩人に勸められ。是非に及ばずフシ立上り。 詞 扨々皆のいかい世話。此禮は未來から。長吉。竹右衛門殿。此方衆と此濡髮は。どうした緣でござらうぞ。最早おさらば。女房。お虎もさらば。 地 わつと泣出す障子の内。此世の別れ生死の別れフシ思切つてぞ。急ぎ行く。 地 程なく入來る人音足音。窺ひ〳〵此家を目掛け。郷左衛門が弟平岡丹平。有右衛門が兄三原傳藏其外捕手數十人。腰提燈に道を照させ。丹平傳藏に打向ひ。 詞 長五郎は聞及ぶ大兵。殊には手練迂濶に掛からば仕損ぜん。貴殿は裏道取卷かれよ。 地 いかにも左樣と三原傳藏。供人に牒し合せ。ぬかるな合點と言捨ててフシ裏道へこそ取掛けゝる。 地 丹平下知して村の若者呼出し。 詞 コリヤ〳〵。最前言付けた通り 地 心得ましたと門口敲き。 詞 親父殿〳〵爰明けて下され御所柿ぢや。畫の地取に腰下を忘れて置いた。中の印判今夜庄屋殿へ持つて行かねばならぬ。サア〳〵早う〳〵と打敲く。 地 心得竹右が行燈提げ。戸口に差寄り小聲にて。 詞 御所柿か。よい所へ。庄屋殿へ行くなら竹右衛門がいひまする。只今大阪から濡髮が來て。前後も知らぬ大いびき。侍衆へ知らして下され。竹右衛門が注進と早ういていうてくれと。 地 聞くより表に雀躍し。 詞 コリヤ竹右衛門。かくいふは平岡丹平。其濡髮の召捕に向うた。ホ、出來した〳〵こゝ明けよ。ア、これ

これ〳〵イヤさう仰山では仕損じあり。彼奴は聞えし大兵殊には手利。寢入ばなこそ幸ひ。どれぞ捕手の内。二人程お入りなされ。年こそ寄つたれ此親仁。三人前はまだ勝負。地然らばさうと愚かの丹平。ぬかるな幻込んでをりますサアお出でと。又跡しめてさし足に。二人の捕手も跡につき親ひ入つたる障子の内。取つたと掛け聲 フシ障子蹴放し。地捕手を二人が膝に引敷き口を留め。詞長吉よ。むまいなア。いやどうでも老功嚴しい〳〵。長五郎も早二三里は行たであろ。もうばれださうか。地勝手にせいと拔合せ。二人の捕手を拜み打ち。音はばつさり表には。すは仕果せたといさみ足。奥もばた〳〵フシ足音ばかり。死骸の血汐幻が。體と顔にべつたり塗り。刀を杖によろめき〳〵戸を押開けて。詞エ、無念や口惜しや。命限りに働きしに。手練の濡髪先を取り。二人の衆もあへなき御最期。まだ某老功故御覽の如く手は負へども。地されども命に氣遣なし。皆踏込んで括つてたべ。詞エ、憎い濡髪遁すなと。地大勢一度に切入れば。心得たりと長吉が。段平物の捲切り。彼方へ退けば此方へ逃げ フシ追つつ返しつ追ひまはす。地竹右衛門は手負の眞似。よろめき〳〵捕手の邪魔。思ひ入り限り。息限り上を下へと。三重へ立騒ぐ。フシ早や明方の。地横雲も雪に覆はれ東白。道の草葉に降る雪は我が身の上と。フシ觀念し。地觀心寺の出外れ道。大竹繁る弓手の方。人音騒げば胸騒ぎして立止り。詞扨は落行く跡へ捕手駈付け。長吉がさぞ難儀。竹右はいかゞと 地行きつ戻りつ立息らふ向うへ。傳藏手の者引連れそれ遁すなの掛聲に。後を取卷く平岡丹平。詞彼奴が眞の濡髪ならん。組手を定め二番手迄極め置き。後詰は傳藏丹平。後は大竹足場は屈竟。地切拔けさすなと下知をなし。兩人床机に腰打掛け。蚤取眼に フシ控へゐる。地濡髪にこ〳〵打笑ひ。詞ホ、〻面白い。竹の林の土俵入。組んでかゝらば腹檜十手なんぞは段平で。めつた無双の投切せん。地琴柱刺股かゝらばかゝれ或は捻り腕投げ。鎗でお出は突落し。組子捕手のひらひを取らんと裾ばせ折つてフシ身構へし。地刀提げ大肌脱ぎ雪の裸身降る雪に。捕手の首筋ひいやりひヤあせ。吹雪に卷かれ目眩き。霙混りに足蹌跟。入交へ〳〵取結ぶは危かり。ける 三重へ次第なり。地難なく組手を打伏せ切伏せ。薙立つれば丹平傳藏堪られず。琴柱刺股捲いて取らんと兩方より。追取り掛かれば長五郎。詞捕手の拔身我が刀左右に捌げ上段に來る刺股を。弓手の刀に發矢と受止め。下段にかゝる琴柱の捻り。地馬手に受けては身を交し。詞ノリ突けば

背け開けば付込み。大竹三本小脇に掻込み裾を拂へばひいわりと。地小雀なんどの如くにて力めばおもりに又しいわり。詞ノリ組んで取らんと寄る所を一跳彈く竹の鞭。傳藏丹平眞劍勝負。斬つて廻れば事ともせず。地難なく刀打落し滅多無性の摑み投げ。膝にひつ敷きサア汝等びくと動かば一打ちと。刀振上げ振廻し既に危く見えたる所に。暫し〳〵と聲をかけ走り來るは南方十次兵衛。長吉に繩を掛け家來に引かせ跡に附添ふ竹右衛門。是も供人取卷いて動かせず。十次兵衛聲を上げ。詞聊爾すな長五郎。其方が科はいふに及ばず合點ならん。其兩人を殺しなば科重つて首拔けなるまい。元來緣者ではない他人の十次兵衛。其方の心の晴れる仕樣は是と地長吉が繩引解き。詞サテ汝が組留めし兩人も此方へ手渡しせよ。サア〳〵と迫立てられ。地忝しと首筋摑んで投出せば。兩人這々起上り。詞ヤア十次兵衛麁忽々々。なぜ長吉が繩解いた依怙贔屓な捌きはさせぬ。濡髮めと一所に括り上げなぜ同罪には行はぬ。イヤさうはいはれまい。なぜどおいやれ。長吉は竹右衛門方に旅宿せしに。人違へにて切立てれば彼が科とはいはれまい。皆其方達が麁相といふもの。又竹右衛門が長五郎といひしも。長五郎長吉。紛らはしい假名故。いそがし紛れ殊に老人。聞き違へまい物でなしと。地言解されて二人共。面膨らして フシ閉口す。詞イヤ長五郎。われも身の欲にせぬ事。主人の爲の若氣。事によつたら御前へ申上げ樣にて濟むまいものでなし。山崎與次兵衛は屋敷のお銀方。かれこれ內緣もあるなれど爰では私の沙汰。サア長五郎立上つて繩掛かれと。地十手振上げ討つて掛かれば濡髮が。切込む刀も緣の綱結ぼれ解けぬ兄弟が。互の心行逢ひに刀蹴落しコリヤ捕つたと。膝にかためて駕籠を持て。詞お上にて言譯濟むまで大事の濡髮。繩は追つていざ〳〵急げと打連れて。地大阪さして早駕籠に逸る長五郎長吉が。心は直に竹右衛門竹の林に住むとらも。勞もよし潔し。心もよしや與次兵衛吾妻。ギン山吹色の菜種畑。花の盛の末繁昌動かぬ。御代こそ久しけれ

竹田出雲

寛延二己巳年　七月廿四日　作者連名　三好松洛

並木千柳